攝津名所圖會

下　矢田部郡

貴重書

291.6309
Ak
12

攝津名所圖會 下

矢田部郡

貴重書

291.6309
Ak
12

武庫川学院図書館
昭和
291.6309
Ak
117096 (2)
武庫川學院圖書

明泉寺

長田社
新古今
あれ田人
苗のしろしも
みなかゝらふ
神のおくにぞ
宮ふ志つくる
白河院御製

真野萩原

此邊の榛木原なり

一万葉 又風雅集にハ人丸とあり謬なるべし

日 いざやこら大和へはやく白菅のまのゝはき原手折てゆかん　高市黒人

白菅の真野の榛原心にもおもハぬ君が衣にぞする

類字和歌集に真野ハ大和国とあるに依りて契沖が吐懐編に曰いざやこら大和へはやくの歌ハ万葉集第三にあり高市黒人の歌二首の内之上に〽白菅のまのゝはきはら行さくさ君こそみらめまのゝはきはら かくとあれハ津の国なり又大和へはやくといふもや宜しとおもへあらハれたりつるハ榛原と書くべきの木なり此ゆへに萬七に寄木のうちに〽白菅の真野の榛なりしもおもはぬ君が衣且その榛ハ日本紀蓁揩衣と有て皮を以て染たる用らるゝその之

前武蔵刺史平知章墓

尻池村の小上街道の南側にあり討死の所ハ小の山手なりしを享保年中並河氏搜索志編集の時ここに巡りし如此石表を立て又た代々討死し其英名を賞し西海道往還の側今の地に移し埋木の世人に家臣監物太郎と共に其忠孝を嘆ぜしめんがためとぞ

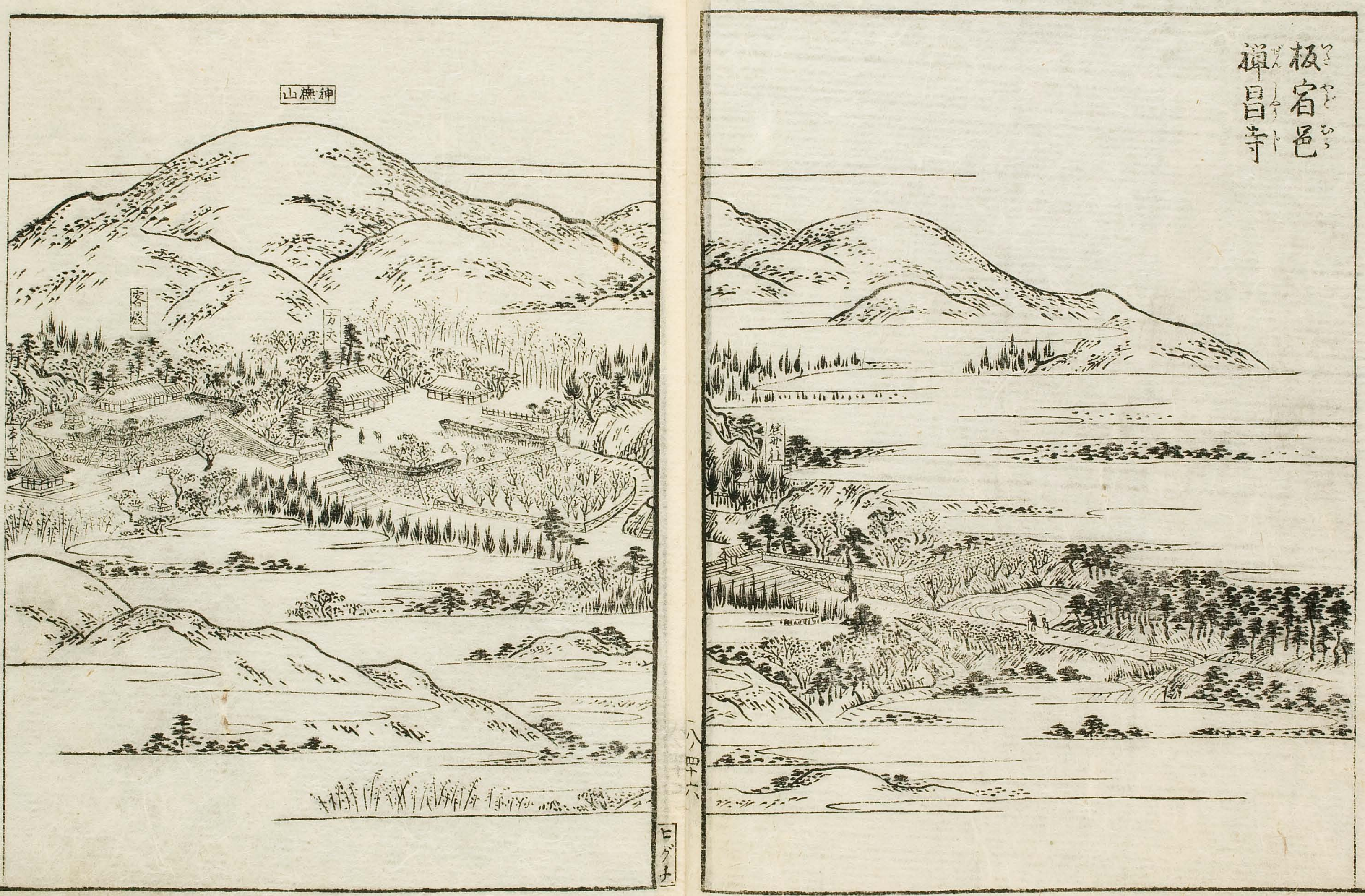
平家物語巻九

生田森の大将軍新中納言知盛卿の御子ハ武蔵守知章侍に監物太郎頼方主従三騎におちられ汀の方へ落ゆき給ふに源氏の武士児玉党と覚しくて団扇の旗差たる者が十騎計鞭鐙を合せて追駈ける監物太郎ハ究竟の弓の上手なりければ取て返し先真先に進む旗差が頸の骨を丘ど射て馬より倒に射落す其中の大将と覚しき者新中納言殿に組奉らんとて駈双ける所御子武蔵守知章父を討せじと中に隔り押双て無手と組でどうと落取て押へて頸を掻立上らんとする所に敵が童落合て武蔵守知章の首を取監物太郎落重る武蔵守を討ける敵が童も討てけり其後矢種の有程射尽し打物抜て戦ひけるが弓手の膝口を健に射させ立も上らで居ながら討死しけるを此紛に新中納言知盛卿ハ其ところを逃延びたまひける

監物太郎頼方墓

知章墓の小街道の側畑の中にあり これも並河氏石表を立る

されば知章卿ハ討死して父を助け監物太郎ハ主君眼前の敵を討て共に討死して知盛卿を扶く平家の中にも是等の英雄ハ文雄の上に立んや左伝にのせたる斉の華周晋の推などゝ同日の論の人傑なり


板宿邑
禅昌寺
神撫山
客殿
方丈
本堂

越前三位通盛墓　墓の北東に松只又本塚碑にあり　盛衰記
云越前三位通盛は湊川の跡にありけるにおち
られしか木村源三成綱と組て討れたまひしはこゝへ
平家物語に通盛卿は山の手の大将軍にておはしけるか
其勢皆落失て討死せられしとぞ　小宰相局の旅に君は
今朝湊川にて討れさせ給ひぬと告る事あり　按摂津志
に曰平通盛墓佐比江堤の東北にありと書り今其所を
尋るにさだかならず　往年これを按るに只平家物語の文によりて
つくれるとぞ　初めにいつはりむかしは湊川山の手の通盛卿をとめ
ぐりて尻池村の東に流て海に入たり　後これは通盛卿の
墓も佐比江あたり也　今此所なり　然し都ぐむつし佐比江の辺
されど此地の事は著しからず
討死しけり

木村源吾重章墓　通盛墓の側池の中にあり源氏の武士近江国の住人木村源吾重章は平通盛と組でとくに討死しけり

長田里　平家物語に見ゆ　兵庫より十町許西にあり　日本紀長田国と書り

長田神社　長田村にあり西国街道の北側に鳥居あり　これより左右並松
弐町許ありて長田の民家を経て本社に至る
西藩しめくをあまつ○此村にあひて長田の里に早苗とる

祭神事代主命　延喜式日名神大月次相嘗新嘗例祭八月十八日　兼神
長田西代東尻池西尻池池田西須磨等六ヶ村の生土神

攝社　二本本社に祭る

末社　松尾　天照太神　八幡　出雲大社神

鳥居額　小野道風の筆

石燈籠　本殿の西にあり　むかし村上天皇の御寄附

日本紀云　事代主神　功皇后誨之曰祠吾於御心長田国則以葉山媛之弟長媛令祭　云云

三代實録云　奉授長田神従五位上　云云

社記云　村上天皇応和三年七月十五日祈雨於長田社　此時社家の桃燈と寄附し給ふ云云　又むかしは大祭事といふ事あり産子多く出て菓人形を三子餘あつらへ社の奥より持出て東尻池の御旅所へ神輿とともに兵田村の浜までにて其菓人形を散々に代る三韓退治の真似とぞ　又西代戸の村長荒田氏を客家と称し神輿の後に渡しの例式あり　次下に見えたり

明泉寺　長田村の奥にあり　天照山と號す　昔は伽藍巍々たり　寿永の兵乱に荒廃す

本尊大日如来　行基の作　長さ尺許　祈るに霊応あり　諸人欽す

越中前司盛俊墓　長田村名倉池の傍にあり　塚下に古松を植たり

平家物語云　越中前司盛俊は山の手の侍大将にて在しが今は落共叶はじとや思ひけん控へて敵を待所に猪俣小平六則綱好敵と目をかけ鞭鐙を合せて馳来り押双て無手と組でどうと落　猪俣は八箇国に聞へたる健者也　鹿角の一二の草刈をば輙く引裂ける程

聞へし越中前司も人目には二三十人が力態をもしけれども内々は六七十
人して上下する舩を只壱人して推上推下す程の大力なれば猪俣
を取て押て動かさず猪俣下に臥ながら刀を抜んとすれども指の
股ちぎれて刀の柄を握るにも及ばず物をいはんとすれども餘に強く
押られて聲も出ず去れども猪俣は大剛の者なりければ暫し
息を休て敵の頸を捕といふは我も名乗て聞せ敵にも名乗
せて頸取たればこそ大功なれ名も知らぬ頸取て何にかはし給ふべき
と云ければ越中前司実にもと思ひけん本は平家の一門たりしが
身不肖なるに依て当時は侍になされたる越中前司盛俊といふ者也
和殿は何者ぞ名乗聞んと云ければ武蔵国住人猪俣小平六則綱
といふ者也只今我命助させ候て御辺の一門何十人も
坐せよ今度の勲功の賞に申替て御命計をば助け奉らんといへば
越中前司大に怒て盛俊身不肖なれども流石平家の一門

なり盛俊源氏を憑んとは思はず源氏も亦盛俊に憑れん
とはよも思はじ悪き君が申様哉とて既に頸をかかんとしければ
正なや降人の頸掻様や有と云ければ更ば助んとて赦
たり堅田の畠地様なるが後は水田のこみ深かりける壊の
上に二人ながら腰打懸て息継居たり良有て緋威の鎧
着て月毛なる馬に金覆輪の鞍置て乗たる武者一騎
鞭鐙を合せて馳来る越中前司怪気に見ければ猪俣
に親しう候人見四郎で候が則綱が有を見て詣来と覚候苦う
も候はぬと云ながらあれが近付程ならば組んとするものを落合ぬ
来事はよもあらじと思て待所に交一段計に馳来る越中前司
初は両人の敵を一目づつ見けるが次第に近付敵をハタト守て
則綱を見ぬ隙に猪俣力足を踏て立上り拳を強く握り盛俊
が鎧の胸板をヘグツト突て後へノツケに突倒し起上らんとを

ミな所が猪俣上に乗り越て越中前司が腰の刀を抜き鎧の草摺
引上て柄も拳も透れと三刀刺て頸を取去後に人見四郎も
出来り加様の時は論ずる事も有とて頸をば太刀の鋒に
貫き高く指上ケ大音声揚て此日来平家の御方に鬼神と
聞へつる越中前司盛俊をば武蔵国住人猪俣小平六則綱
が討たるぞやと名乗て其日の高名の一番に附にけり

蓮之池 芝田の畑の方にあり広サ凡五十畝むかし此基の堀しめ農業旱干
魁の悲が除んがため蓮一株を植ゑて浄土の八功徳池
に准ず又一説には小松内府重盛の家臣蓮池権頭家貞が此
の所に有しより川て蓮の池といふとぞ

蓮祠 蓮池の北山岸にあり土人は基祠といふ巡りに古松数本あり
何れの家なるかいまだ考ず

淀継橋 真野継橋の一名とも又駒ケ林村にありともいふ
都て此辺の惣名を真野ノ浦といふ

万葉
真野の浦のよどの継はし心ゆもおもふやいもが夢にし見ゆる　吹芡刀自

続古
まのゝ浦の淀のつぎ橋法たもせでつらしと人を渡つるかな　経明

今案
志らずめや淀の継橋よとゝもにつれなき人を恋わたるとは　長実卿母

続拾遺
年経ぬる淀の継橋度にたわつる中とや絶もせでなん　光明峯寺入道摂政太政大臣

夫木
絶絶てえらめも志らぬまのゝ浦にわたしけひなた淀の継橋　隆祐

井蛙抄云　真野の浦の淀の継橋は　摂州
真野の　ちろさ　は　大和
真野の浦まのゝ入江は　近江
真野の萱原は　陸奥
かくのぬく混乱なれば別ちがたき事也又其の国まのゝ浜辺のまさこと地と読
るは豊前の国と云云まのゝ浜に、太和にあらばといふ事おぼつかなし

源氏松 駒ケ林の村中にあり伝説源氏次广浦に居すといふ事あり千
植置かしとぞ一名駒替松或は二葉松又茶筅松とも
いふ古松は枯て今あるは
植継なりとぞ

名寄
いかにしの駒が林の松これを植し古葉もかゝるさかりけむ　兼頼

薩摩守忠度塚 駒ケ林の中にあり塚上に五輪の石塔が居たり畢竟
平家都落のとき忠度唯一騎明石が浦まで落られ
たるに忠度は六弥太忠澄に追かけられ取てかへしひとさ組で討れ
給ひし其の人をうち葬る石に墓のあるべき覚とて貴か土人云
明石に在る腕塚なりとぞ抑忠度卿は平相国より舅
六の舎弟なり一ノ谷の役の時は大将軍なり文武両道
に秀で道の達人なり弱冠の時は熊野の山中に籠りて大加
の平業六輪の奥旨を解する名将也忠澄よりは首討まりようち
とは言へども名が志らざるを箙に付られし短冊が見えて見
されて旅宿花といふ題にて

ゆきくれて木の下かけを宿とせハ花やこよひのあるしならまし　通

忠度と書よける故にこそ薩摩守とハありて名れと平家物語に見えたり
又岐蘇の義仲平安城に攻入むとせし時平家乃一族
安徳帝を奉して西海に落行れしに薩摩守途より引返し
て五條三位俊成卿の許におはして一門の運命今ハはや果ぬ
撰集の御沙汰有へき由兼てうけたまはりしかハ一首なりとも
御恩を蒙らむとて百餘首書あつめられたる巻物をよろひの
引あはせより取出してまゐらする俊成卿かくいはれ此ことをと感
ありしハ上ハ由めく跡を存しうち捨もし只今の御わかれこそ
猶も深うあはれも袖に備まくこそ思へと宣へハ薩摩守かふとを
野山にさらさせ浮名を西海の波に流さば流せ今ハ
さひ甚し嘆しとて馬にうち乗り西の海さしめて落られ
し其後千載集に故郷の花といふ題にてよまれたりける
読人しらすとて
入られたり

さゝ波や志賀の都ハあれにしを昔なからの山さくらかな

これも平家物語に見ゆ　近比筑波の石正溥か忠度卿を詠しける詩に

江山天暮宿誰家
客少芳菲棲乱鴉
龍去六軍行幸日
歌成千載故郷花
無邊風雨摧瓊樹
一片春雲捲赤霞

唯有須磨浦上月　松濤依舊落平沙

菅神飛松　板宿村の山頭にあり菅公筑紫へ赴き給ふ時都よりこゝに飛来りしとぞ傍に天満宮八幡宮の社あり此地の生土神也

神撫山禅昌寺　禅宗　派家　同村の小山手にあり寺を霽雨山と号す

本尊聖観音　安阿弥の作　長弐尺許　**開基正続大祖禅師**　月菴宗光和尚といふ往昔
延文年中の草創也　伝云宗光和尚ハ美濃国の人也姓ハ江氏なり
幼より学窓に随身し一年唐土薬禁山へ登り瓊源の宗意を
授り帰朝の後当山に来り坐禅する半日あり時に神人来りて
頌偈を捧る翌日山嶺へ攀登れば帝釈天の神祠あり此霊現
なりとて帝釈神撫山と号し浄刹を営む宗光和尚ハ老年
但州黒門大明寺に入りて康応元年三月廿一日寂す

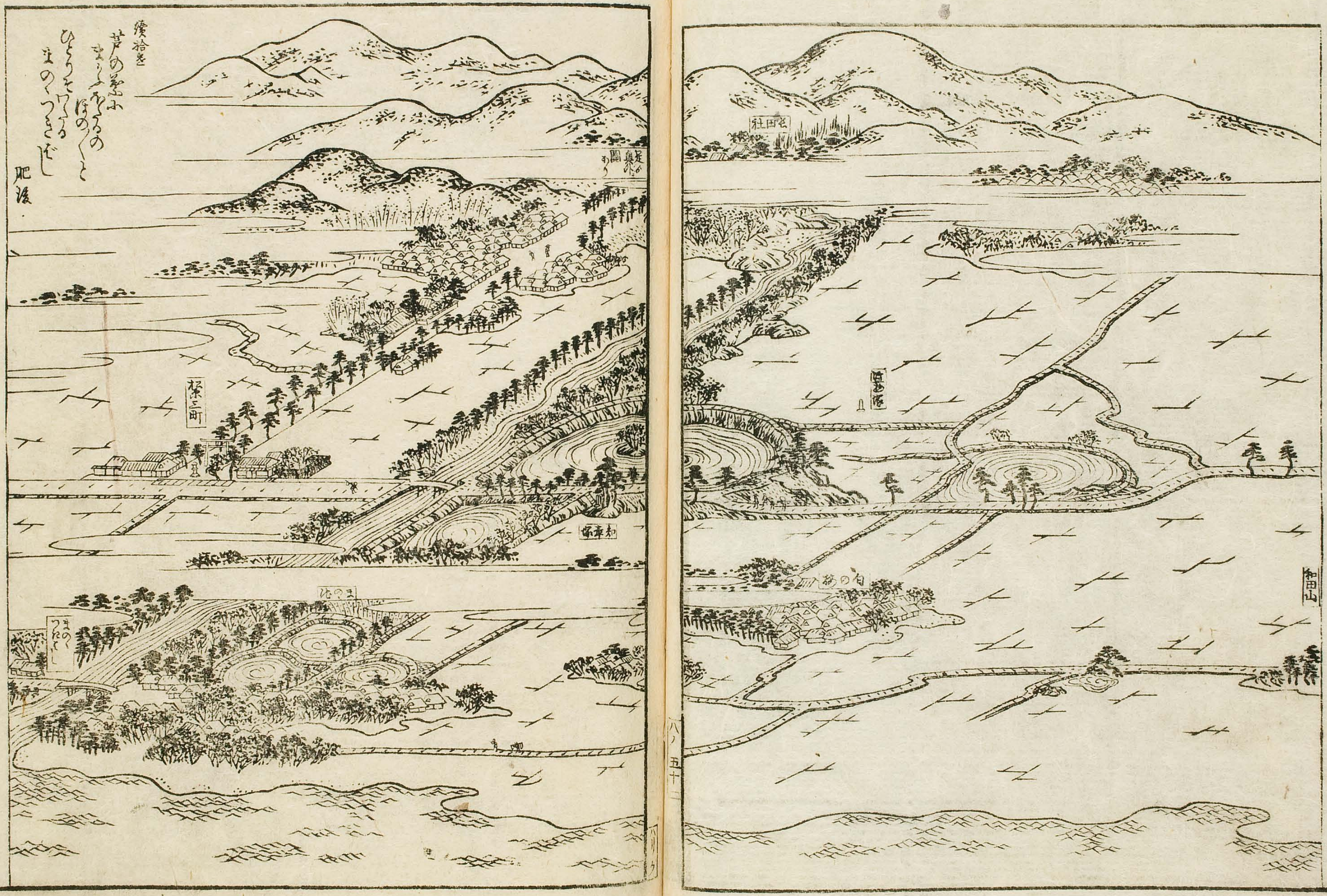
方丈画　狩野永徳の筆也　播州三木の城別所を攻らる時此寺大半荒廃す
御治世の後上聞に達し再興の御教書を賜ハる

鎮守　然ル権現を祭る一説ニハ神功皇后三韓帰朝の御時こゝに至り石座にありて巌を掛給ふ故神撫山といふこゝに此神を祭る

木犀　仏殿の前にあり開基和尚唐土より将来しけるとぞ
呂氏春秋曰桂之一種也叢生巌嶺間謂之巌桂俗呼為木犀
南方草木状曰江南桂八九月開花無子此木犀也

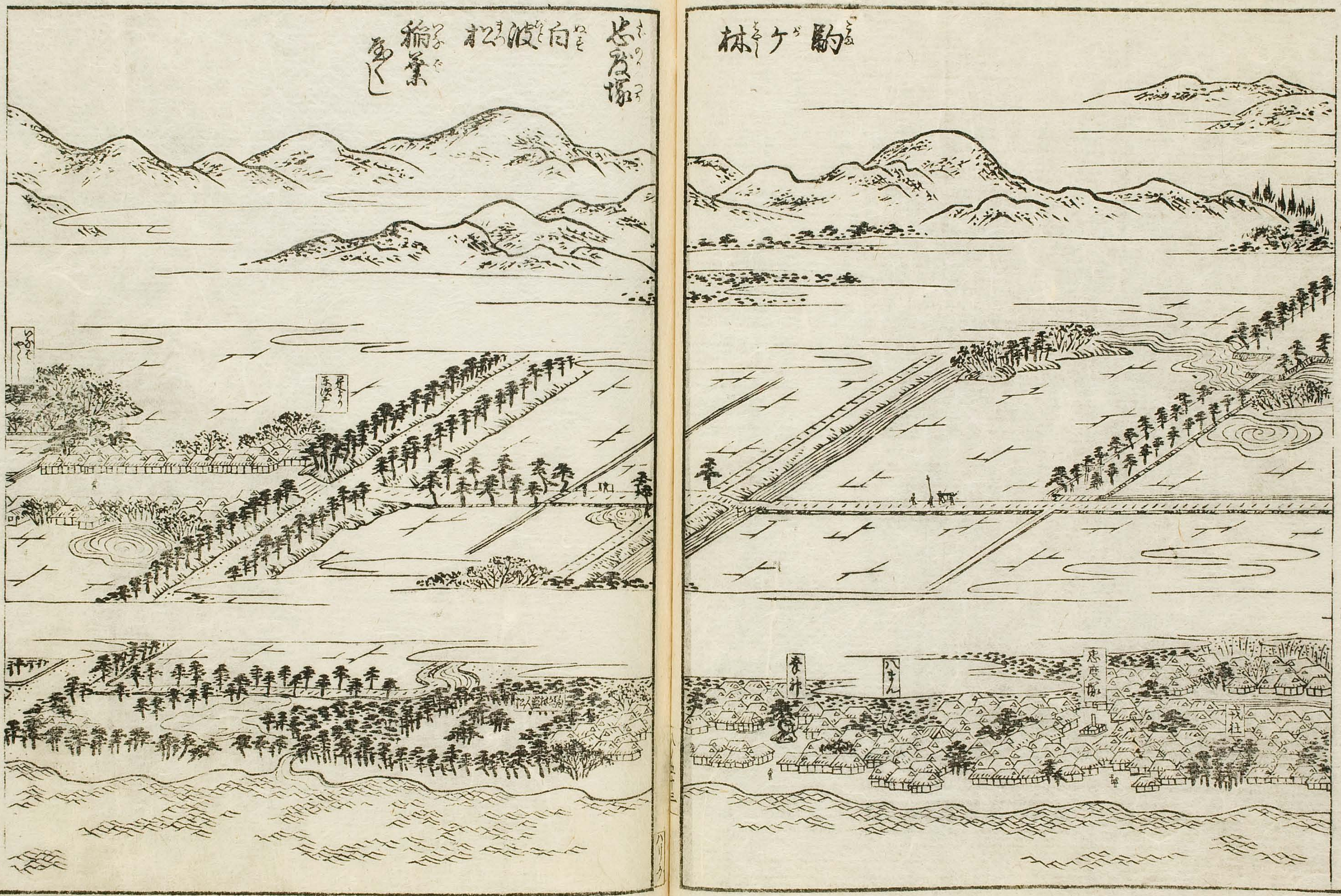
丹楓　大樹多し枝葉繁茂せり秋の末紅錦のかし遠近来りて目を驚かしむ

本尊ハ釈迦か阿弥陀か紅葉の句　播ノ別府　瓢水

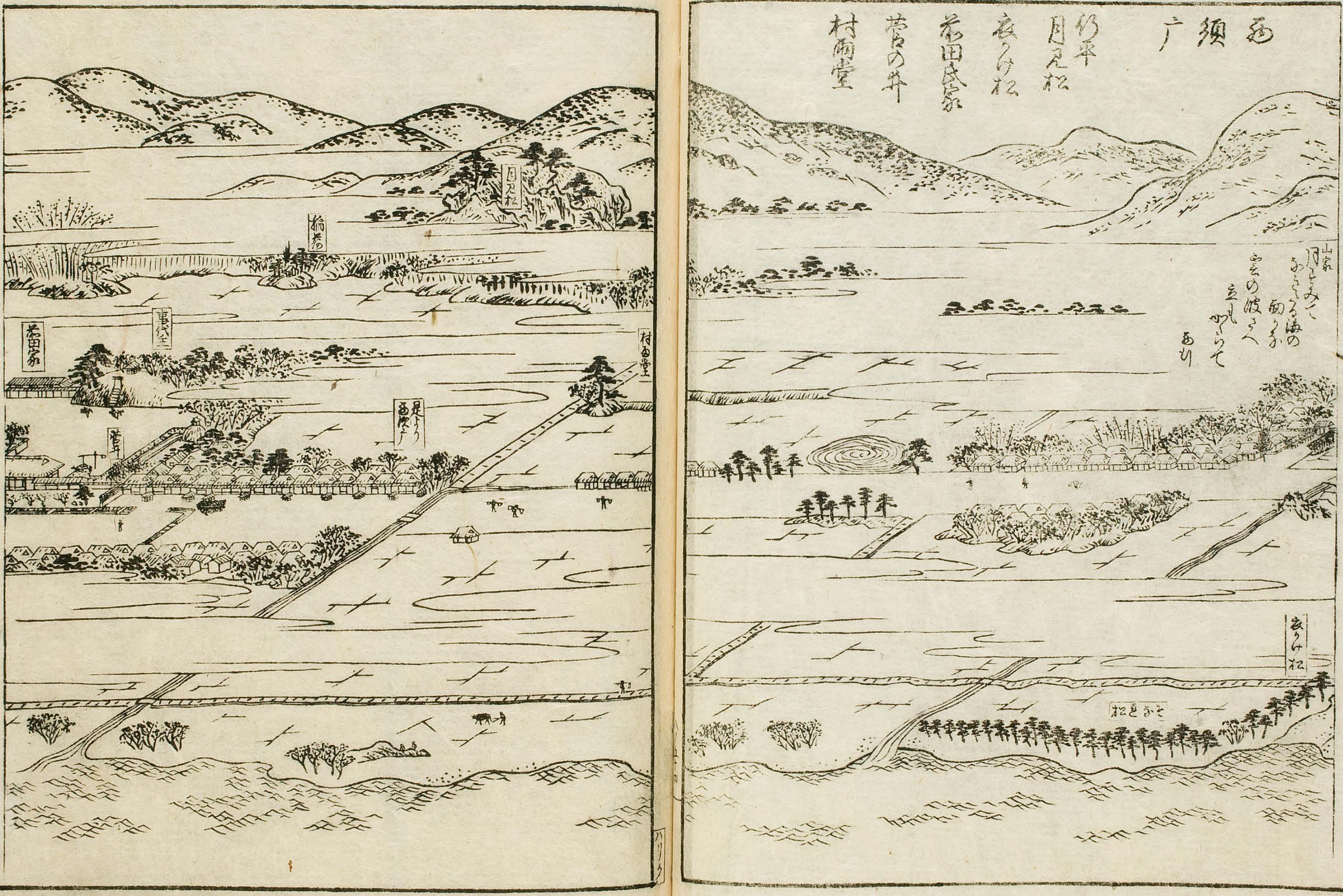

續拾遺
肥後
是ゟ奥外ニ圖あり
長田社
和田山

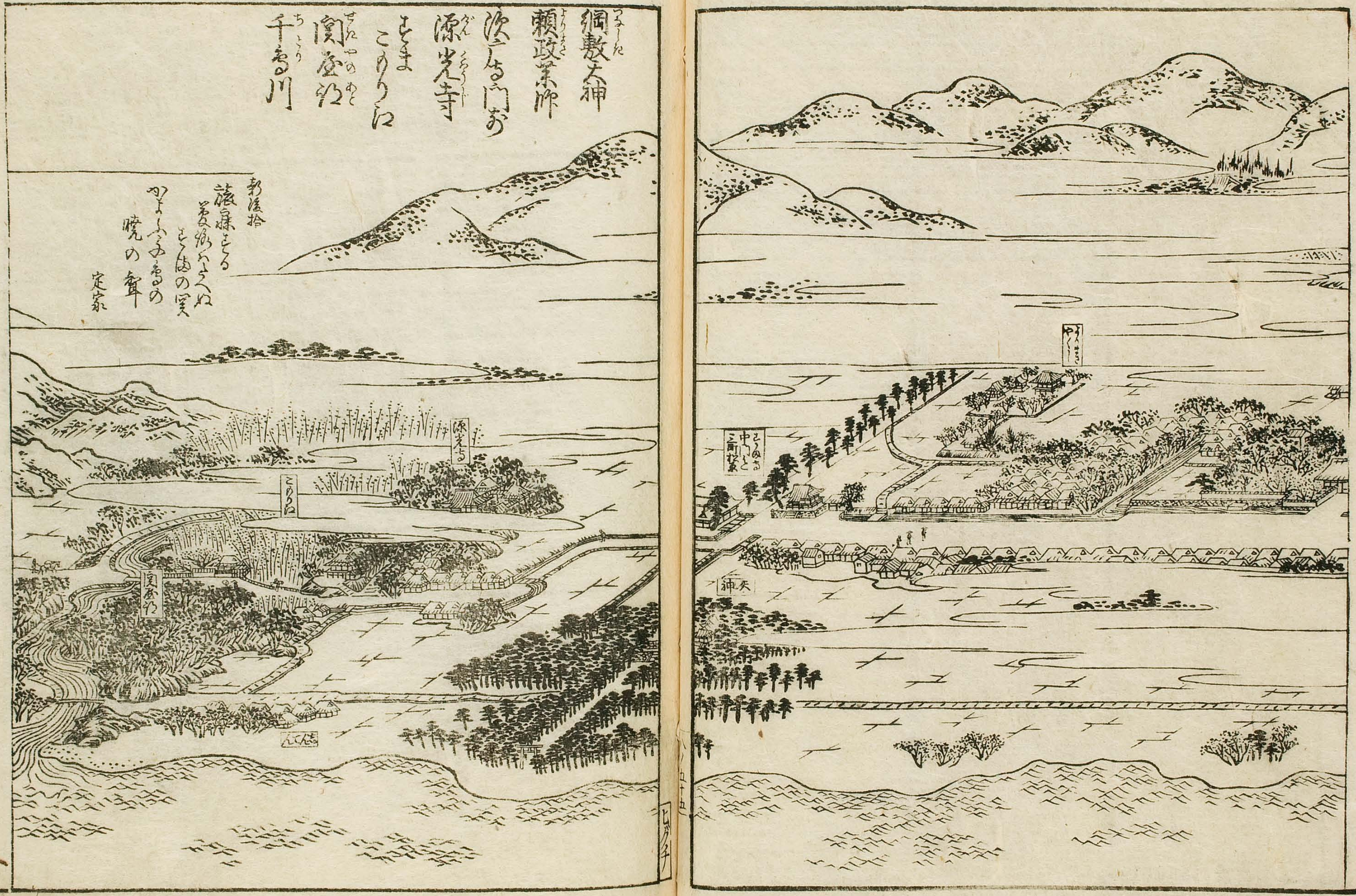
勝福寺
天神
聖霊権現

蓮の池
源氏松

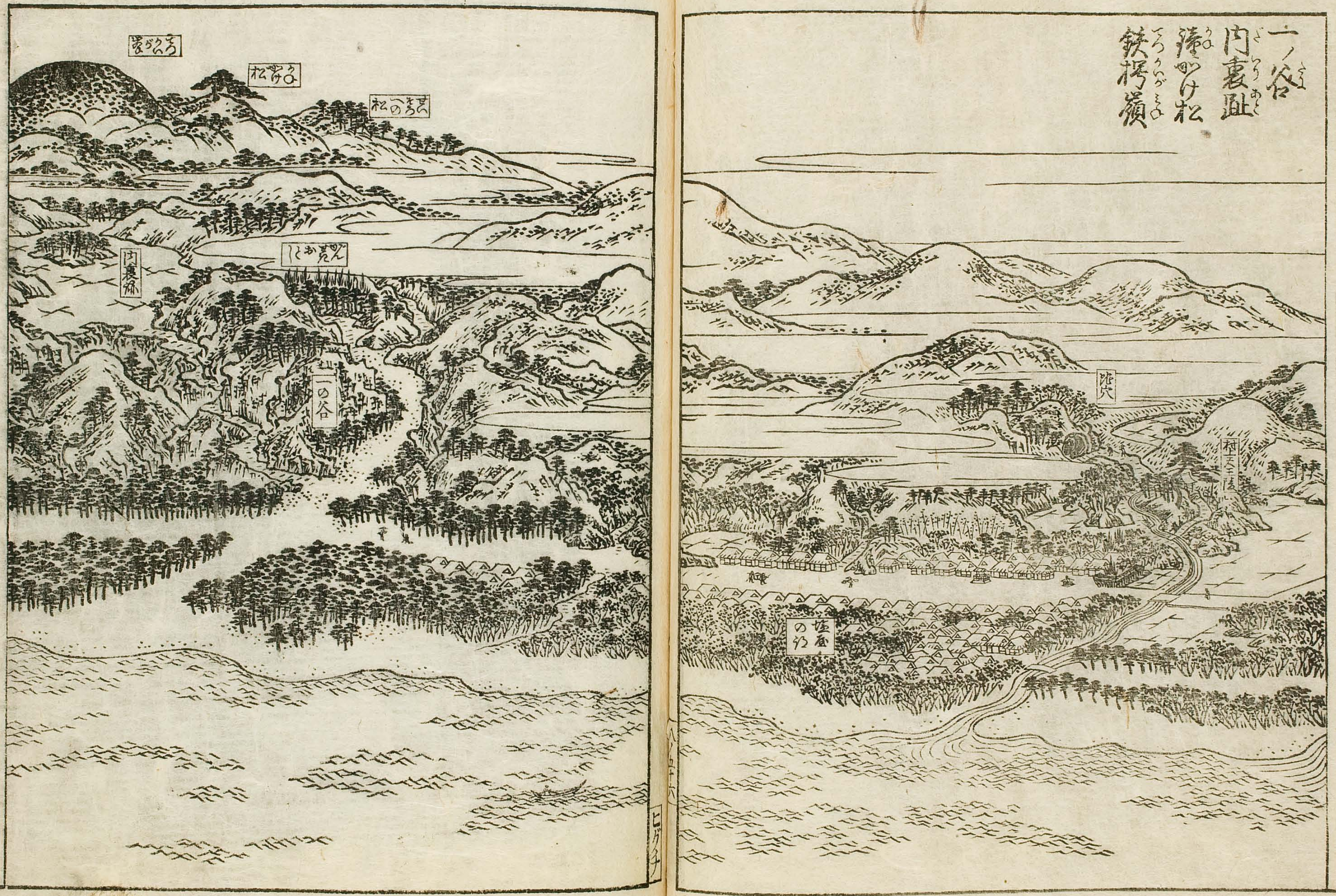


忠度塚
稲葉薬師
駒ケ林
八まん
忠度塚


西須磨
行平月見松
衣かけ松
若田氏宅
菅の井
村雨堂



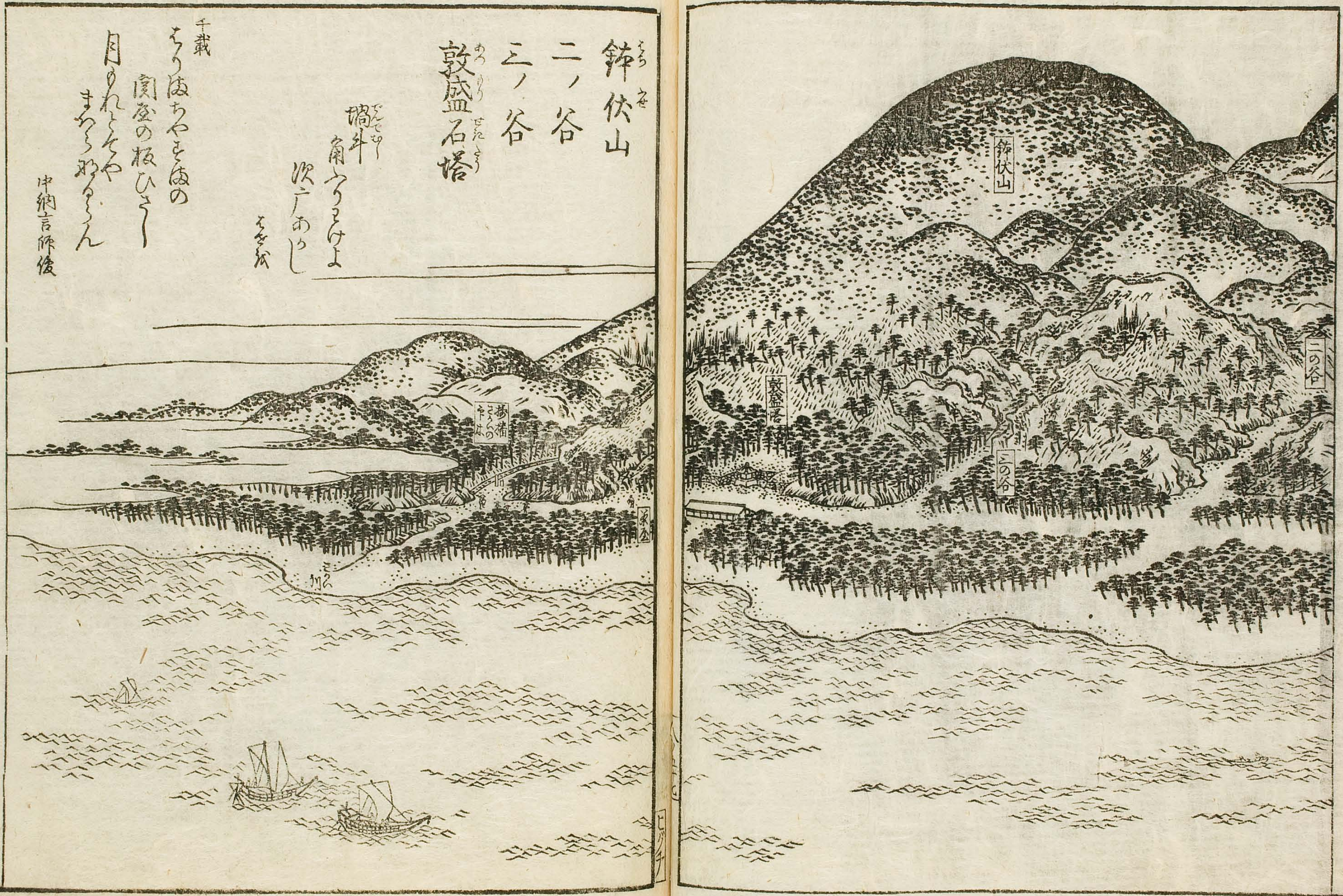
綱敷天神
頼政薬師
源光寺
関屋跡
千鳥川
新後拾
定家
源光寺
関屋跡
天神


一ノ谷
内裏跡
一の谷
村上天皇陵

鉢伏山
二ノ谷
三ノ谷
敦盛石塔

蝸牛角ふりわけよ
須磨明石
はせを

千載
はりまちやすまの
関屋の板ひさし
月もれとてや
まはらなるらん
中納言師俊



如意山妙法寺

妙法寺村にあり新鞍馬寺といふ　真言宗　坊舎七宇

本尊毘沙門天　長六尺許　行基の作

奥院　蓮臺寺と号す次に薬師堂日前にあり　阿弥陀堂あり

当寺初は聖武帝の勅願所にして伽藍巍々とし坊舎三十七宇あり今二王門中門諸堂の礎所々にあり年暦隳りて荒廃に及びし所養和六年定範上人中興し修りし上人は原雲別所根の人なり十五歳の時洛陽東寺の実恵大師に仕へ剃髪染衣し高野山に登て三密瑜伽の奥旨を明らめ上観に遊じ洛の鞍馬寺に籠く示現を蒙り此地に頽廃せる伽藍を造営し子院之十七坊を建く西の方に観音堂あり北ノ嶺に梵天の森あり遠近の貴賤渇仰せしとして来れし大旱の時雨を祈給ふに験あり又高倉院の附福原遷都長久の御祈禱ありて新鞍馬寺と詔ありて崇は其後高師直同師泰軍馬の岐とせしゆへ又大に破壊しく漸今のごとく再営あり什宝に称徳帝宸翰の経并蔵む又当村の入口に妙光といへる寺ありむかしハ妙法寺乃子院にてありしが今禅宗黄檗派霓雲和尚が中祖とす

善福寺

真言宗　車村にあり妙法寺より十町計北

本尊矢拾地蔵　長五尺許　建武年中足利尊氏公大庄合戦の時此本尊が信作ありしゆへ霊験ありて一法師と現れ敵より射る矢を箙に拾ひ味方の勝利とし給ふゆへに此名が傳へり旧地は今庫菊谷奥之御堂跡ありむかし此本尊は秋毎に龍燈を海中より其の頸に戴き献じけるとぞ故に奥の御堂の名あり又天火堂ともいふ又今庫後福寺の観音を奥之御堂の本尊と称ずれども是非分明ならず

艸賊松

駒ヶ林村の西池田村の中にあり株の太さ三丈余枝葉南の方へ流く二丈計あり此辺みな海浜にして白浪の立ぬ除も多かりしゆへに此名ありとぞ也や艸賊を白波といふ事後漢の張角が傳より出たり

聖霊権現祠

大手村にあり例祭六月廿日八月廿七日

大手板宿池田東須磨等の生土神なり

熊野権現　一説曰聖霊はもとハ熊野証誠権現といふは謬りとぞ

攝社　右大己貴命　左事代主命　軽児神　牛頭天王

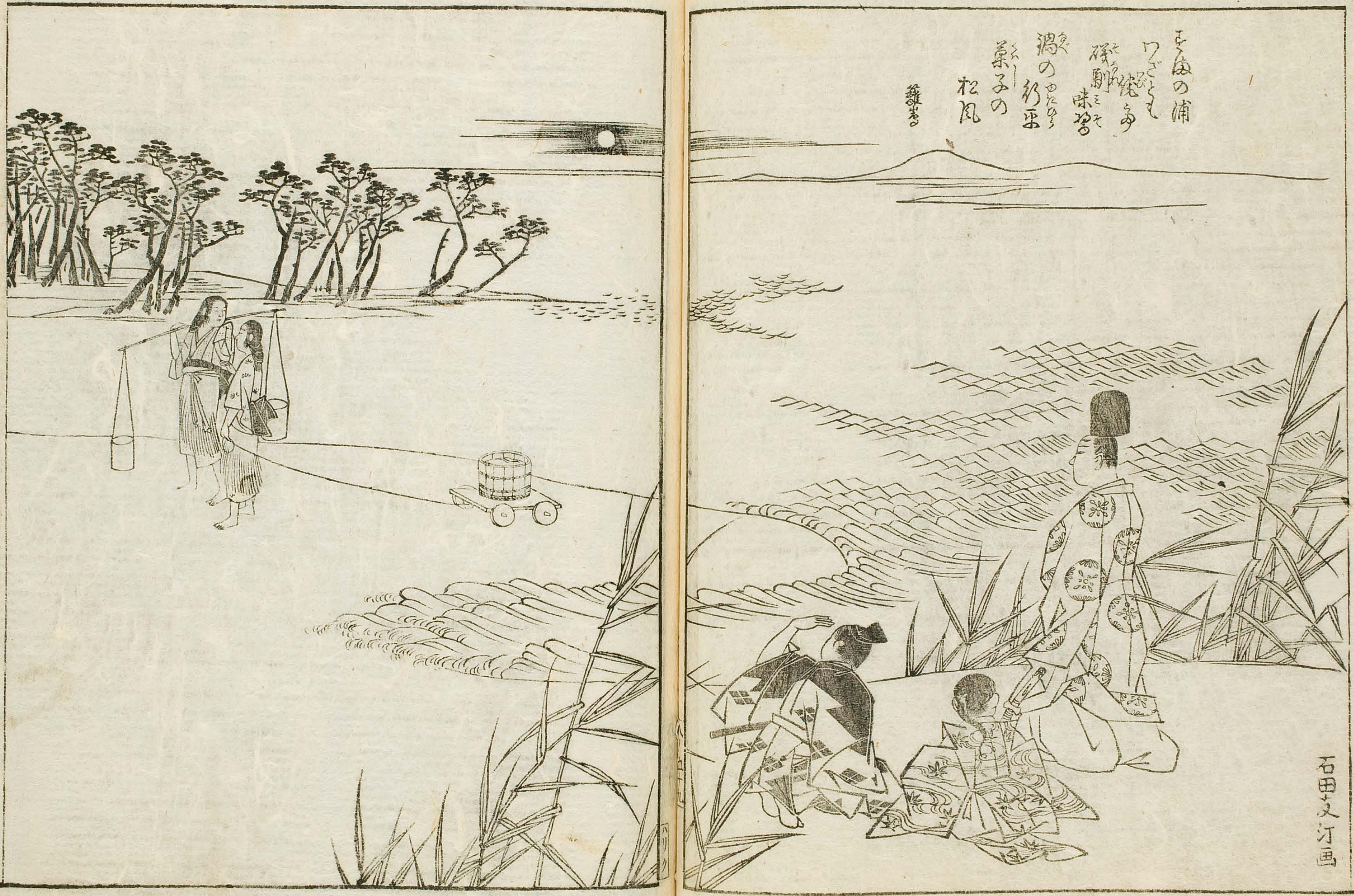
桂尾山勝福寺

大手村権現祠の奥にあり　古義真言宗　坊舎五宇

本尊聖観音　弘法大師の作　長三尺八寸計

脇士不動毘沙門

開基證楽上人　一条院御宇永延二年熊野権現の示現と蒙り此寺を建立し什宝に弘法大師の錫杖證楽上人供養の本尊十六善神像同幡弘法大師の筆両界曼荼羅呉道子の筆十六羅漢流れ筆の釈迦文殊普賢唐本大般若経平相国の寄附人成蔵新羅章の甲冑龍の玉其外数々あり


石田友汀画

須磨里（すまのさと） 旧くハ須磨と書 須磨寺より西半里ばかりにあり 西須磨 一村なり 東須磨 須磨浦の三村あり 原ち今の西須磨 東須磨ハいにしへ辻堂村といふ 上古ハ山陽道の驛にて延喜式に出たり 今ハ農家のみにして海濱なれど漁家もなし

古今 田むらの御時に事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人につかはしける 行平

わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ

源氏すまの巻

かの須磨ハむかしこそ人のすみかなどもありけれ今ハいと里ばなれ心すごくて海士の家だにまれになど聞給へど人しげくひたたけたらん住居ハいと本意なかるべし さりとて都を遠ざからんも故郷おぼつかなかるべきを人わろくぞおぼしみだるゝ 去京行平朝臣 ゆくすゑ思ひはべるをまにかゝりしたといふ須磨

ちりかゝる入日や須磨の秋 涼菟

月見ても物たらハぬや須磨の夏 芭蕉翁

ほろほろと雨そふ須磨の蚊遣かな 瓢水

須磨籬（すまのまかき） 西須磨の家毎に常に表の方籬を結ふ 土人曰 むかし一谷の城いまだ落ざるの前 安徳天皇紀にしるせり 大宮人此すまの里海士の苫家にかりそめのひまなく行宮としたまへる附 家毎に籬を結ひかけし其遺風今にありとぞ

俺衣やとさう須磨乃古籬 既白

名産磯馴味噌（なさんそなれみそ） 麦にて製したる味噌也 近世此里の名物とし 又潮を汲て糀と煮たる潮雑水とて此里の農家にハ今も舎しなる物なり 風月庵のぬし 須磨に閑居のおり狂哥を詠る

侘ぬれハ身みしむ味わりきすまの麦みそ潮雑水 似雲

見ゆうちに月志川ミなり須磨の浦 園叟

須磨浦（すまのうら） 古詠多し むかしハ此浦に塩屋ありしが ことゝ海邊淺になりて塩竈絶たり 近年風月庵これが再び興さんやと計ひしかども 王事ならず

拾遺

白波ハそとよに立まて明石も須磨もおのが浦〳〵 人丸

古今

すまのあまの塩焼煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり 読人しらず

同

須磨の海士の塩やき衣おさをあらみ間遠にあれや君がきまさぬ 同

詞花

すまの浦に焼く塩竈の煙こそ春にしられぬ霞なりけれ 俊頼

千載

夕月夜いてゝもの煙うちしめり塩たれまさる須磨の浦人 俊成

新古　すまのあまの袖に吹こす塩風のなるとはすれど手にもたまらず　定家

同　なれゆくはうき世なればや須磨の海士の塩やき衣まどほなるらん　女御徽子女王

同　すまの浦のなぎたる朝はめもはるに霞にまがふあまの釣舟　家孝

続古　すまのあまの浦こぐ舟のかぢをたえよるべなき身ぞ悲しかりける　小野小町

琢磨海（すまのうみ）

文本　すまの浦眺望せし人のなごりや手に召の松乃下にのこるらん　東宮文法師

されどすまのうらはむかしより月の名所にて紫式部も中秋乃月にすまの巻より書初めしとかや　源氏物語かの巻にも十五夜なりけりとおぼし出て殿上の御遊び恋しく所々ながめ給ふらんかしと思ひやり給ふにつけても月の顔のみまもられ給ふ二千里外故人の心とずし給へる其外の涙をとどめ給はず　光源氏

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遥かなれども

あれより手人に又光源氏

あまりつむかけたの中にまじれて何ゆゑすまの浦とかるらん

心づくしの秋風に海はすこし遠けれど行平の中納言の関吹こゆるといひけん浦波よるよるはげにいとちかくきこえてまたなくあはれなる物はかかる所の秋なりけり　中略　琴をすこしかきならし給へるが我ながらいとすごう聞ゆれば弾きさし給ひて　源氏君

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

せんざいの花いろいろ咲きみだれおもしろき夕暮に海見やらるる廊に出給ひてたたずみ給ふすまのゆゆしうきよらなることところがらましてこの世のものとも見え給はず白き綾のなよよかなる紫苑色など奉りてこまやかなる御直衣帯しどけなくうちみだれ給へる御さまにて釈迦牟尼仏弟子となのりてゆるるかによみ給へる又世にしらずきこゆ沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞ゆほのかにてちいさき鳥の浮べると見やらるるも心細げなるに雁の

つくづく帰京かちの事にまゐりへる我おもひかはりにさく涙かこちこそ乃
こほろぎのなくこそひ給へる御よそへくるし御ずゝにをとへる事を
故につれ女房しれ人々のこゝ源氏につゞかすにはる 源氏君
を川辺へとひしき人のつきあれやさひの宮にて都の事にもれ
恩賜の御衣は今此にあり 菅公が宰府にての詩の句 とぞしつゝ入給ひぬ御ぞそ猶よ
身をはなさず御そばにをかせ給へる 中略 五節の君は綱手引道もはおし
きに琴の音風にほとこてそはかにゆかしと見へて御せうそこ給へり 五節君
琴の音に引とめらるゝ綱手縄たゆたふ心を君しるらめや
源氏の君御返しに こゝろありてひくての綱のたゆたはゞうち過ましや須磨の浦なみを
又やよひの朔日にいできたる巳の日 今日なんかく思すことある人はみそぎ
しなへき 中略 陰陽師めしてはらへせさせ給ふ 俄に風ふき出て空
もかきくれ 御はらへもしはてず立さはぐ 波いといかめしうたちて 神なり
ひらめく 中略 いさゝかねいり給へれは そのさまともみえぬ人来て 源君はのどやか

に経うちずしおかず叢めれは袖をとゞめかやすく風ぞようるもぬく
おほくそはるゞらんのちうかるべし　あれを見て明石の文学 粟田邦美が詩に

帝京花夢此飄零　瑣闥風光入夢青
南浦寒烟憐夜月　北山芳草憶春庭
驪駒留別故人去　綵鷁傳歌仙客經
百丈崩濤天潑墨　可堪雷雨撼茅亭

驪駒の事は葵の上の兄三位中将須磨に来りあひく源氏の君の蕭居を
訪ひまいらせられしが帰京の時源氏の君驪駒などうたひ給ふ事を詠の
事にこれへるを挑よるなり
○河海抄の序に云光源氏は一条院の御時寛弘のはじめに出来て堀河院の
康和の末に弘まりけると云云 同抄に云源氏物語のおこり説々ありと
いへとも西宮左大臣安和二年大宰権帥に左遷せられ給ひしかは藤式部
おさなくよりなれまつりておもひなけきたるに大斎院選子内親王（村上女十宮）より上東門院へ
めづらかなる草子やさぶらふと尋申させ給ひけるに うつほ竹取やうの古
物語はめなれたればあたらしくつくりいだしてまいらすべきよし式部に
おほせられけれは石山寺に通夜してこの事を祈申けるにおりしも
八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風情空に
うかひけるを忘れぬさきにとて仏前にありける大般若の料紙を
本尊に申うけて先須磨明石の両巻をかきとめけり これによりて
須磨の巻にこよひは十五夜なりけりとおぼしいでゝと侍る 後に罪障

懺悔のために般若経を一部六百巻をうつし書て奉納したる今に此の寺に
ありと云云　光源氏を西宮左大臣になぞらへ紫上を式部が身によそへ
つゝく周公孔子の聖君をはゞかりぬ李白杜子美白居易なとの風流
を遂藤納言菅丞相の御ためしを引て書出したるなし
其後次第に書加へて五十四帖になしてまゐりしが権大納言行成
に清書せさせられて斎院へまゐらせらるゝ又云誠に君臣の交
仁義の道好色の媒菩提の縁にいたるまでこれがのせずといふ事
なし其おもむき荘子の寓言におなじきものか言葉の妖艶さら
に比類なし彼部の中に紫上の事をことにすぐれてかきたるゆゑに藤式部
藤式部の名を改めて紫式部と号せられたり一説に云藤式部
の名幽玄ならずとてとく後に藤の花の色のゆかりにて紫の字に改め
られたりと云云　初一条院御覧有て不可説ノ物也凡俗の所為
に非ず式部は日本紀などよくよみたりと仰られしより日本
紀御局と人々賞しけるとぞ

同じく須磨の事に
内侍のかみに御ふみ例の中納言の君のもとに忍びてつかはす中なるに
つれ〴〵とこしかた行末おぼしつゞくるにつけても　源氏君
こりすまの浦のみるめもゆかしきを塩やくあまやいかゞおもはん
八雲御抄云こりすまの浦とはいひ所なり但別なる事はなし又いふ人もありと云云
こりすまとは不懲と書之まの字なかし須磨の浦によみかけたる也とも又曰
こりすまのうらとはなどいふにこそとも

続古
旅人は袂涼しくなりにけり関吹こゆる須磨の浦風　在原行平

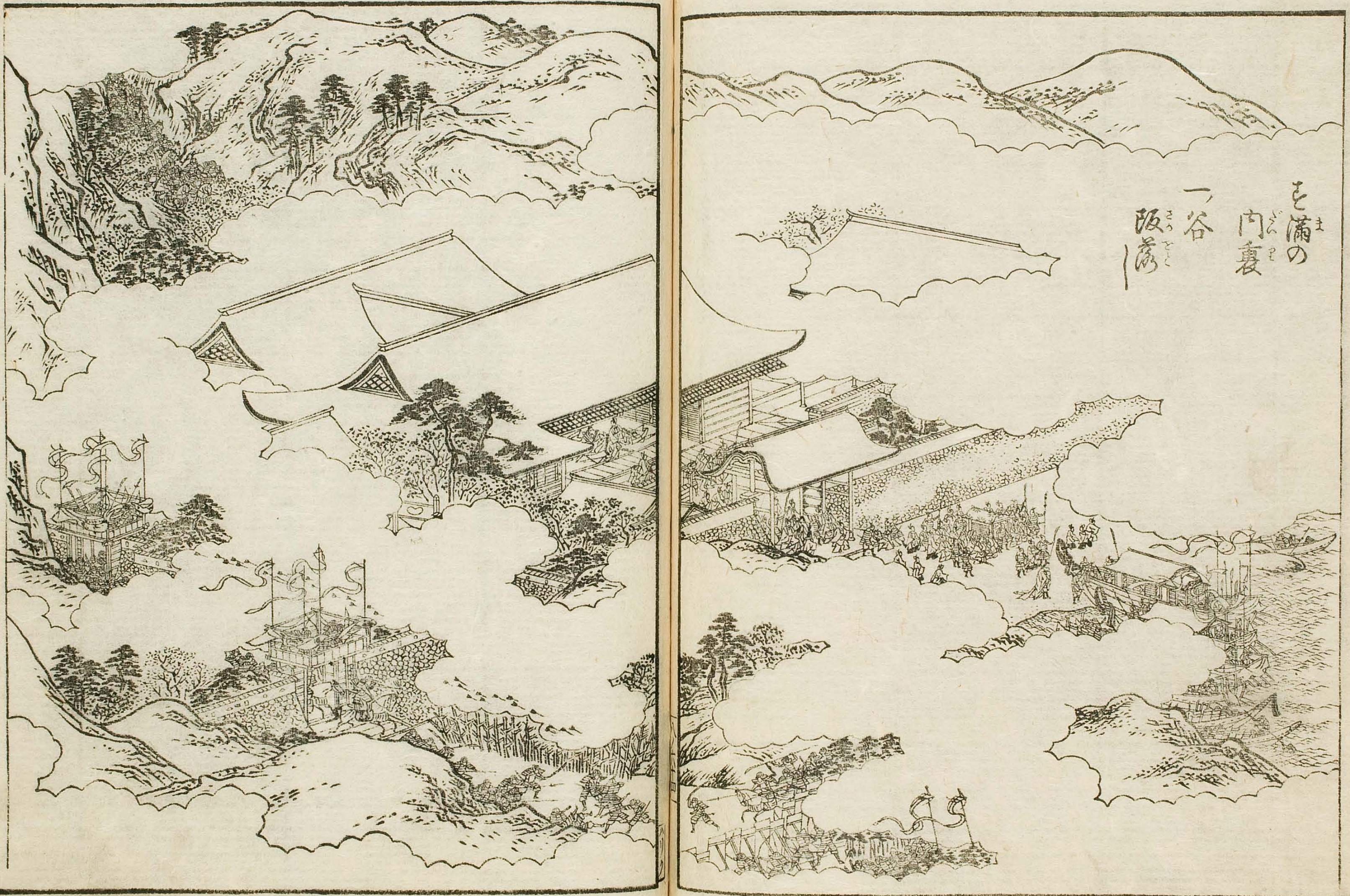
花鳥余情に関吹越る須磨の浦風の歌は壬生忠見が集に侍る行平中納言
の歌は此物語にのせたりされば続古今に源氏にもとづきて則行平の
歌と入られたりか成忠見が歌によく似たる事いかなる事かしらず人は
上にも漢家本朝ためしおほかりと見えたり　源氏物語にあるまし
又勅撰に行平とのせられたるを
それより後の世行平と定むるにこそ

かゝるに文花多く古詠おほくありて其むかしより騒人墨客
こゝに来りて此浦の風光を賞じたるも亦多かりき　されど
年祭星霜かさなりて名のみのこりて廃して滄海桑田となりて
今は只土民の口称にのこり残りたる妻の曙あるは磯馴松の色うるはしく秋の
月は名のみして此浦の景猶あはれむかしも今も変らずとぞ見えし

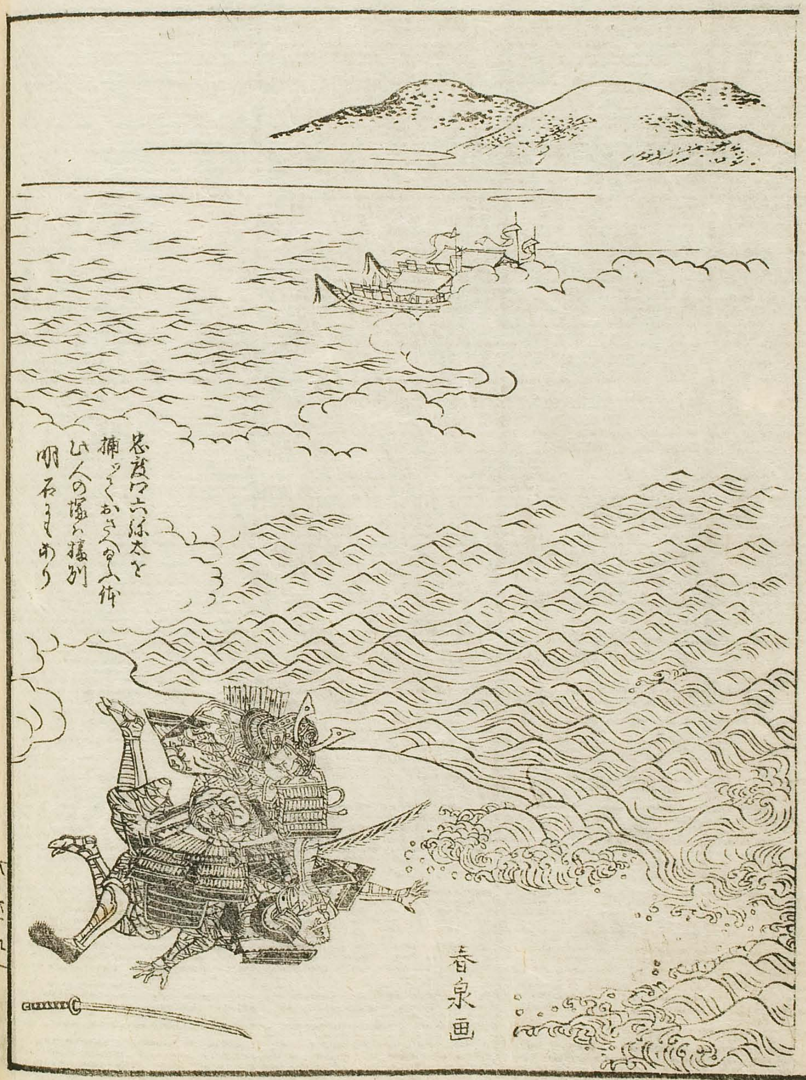
行平卿侘住蹟

左遷の時東須磨西須磨の間字を葛蒲小路といふ是なり　国史に見えたり

在原行平卿は平城天皇の皇子一品阿保親王の一男なり　天長三年
に在原の姓を賜ふ承和七年より次第に昇進し斉衡二年正月に
四位因幡守に任じ四年に兵部太輔に叙し其後貞観十二年二月十二日
参議に任じ年五十三同十六年六月左兵衛督になる伊勢物語に此男の兄
なる人のかたをなりける其家のおれ海のほとりにあそびありきてと書るは
此時の事なり　元慶六年正月中納言に叙し年六十五同八年正三位
民部卿仁和元年に按察使同三年四月十二日致仕となり続に寛平
五年七月廿四日薨じ年七十六


す満の内裏
一ノ谷
坂落し

平家一門落足
へいけいちもんおちあし


忠度は六弥太を
捕っておさへて作
此人の塚は摂州
明石にもあり
春泉画

行平月見松　東須磨の小川尾瀧にあり古松の大樹七本ならびて此所より須磨の浦一目に見ゆり風景いちじるし　行平卿賞月亭の旧跡といふ

衣懸松　東須磨の浜辺にあり松風の謡曲によりて名つけ初しならん

因幡遠山松　月見の松より寅卯の方半町計にあり松風村雨の旧跡ともいふ按ずるにかの卿の和歌より名付しならん

古今離別
立わかれいなばの山の峯におふる松としきかば今かへりこん　在原行平朝臣

因幡薬師　東須磨にあり乗福寺といふ

本尊薬師仏　長さ一尺二寸　寺説云行平卿此浦におはせしときの念持仏なりとぞ按ずるにかの卿の歌によりて名付る因幡薬師は京師にあり在原行平との混雑も覚束かし此説世に多し

松風村雨旧趾　西須磨の東端街道の上にあり此地は平卿謫居乃迹といふ葛蒲小路といふ字今にあり謹云松風村雨の二人は海士の小女なり古井畑の漁女なりしが行平卿に召れ給仕しけるとぞ近きころまで辻堂なるものありて土人これを村雨堂といふ今は志るしに古松を植あり

磯馴松　須磨の浦に浜松といふ謹云行平卿帰洛のとき余波を惜まれ松枝に衣の方へ靡きしといふ廣異記云陳の玄奘といふ沙門西域に往んとて霊巌寺の松一樹を撫て日く吾西に去らく汝が枝を西に長をへし去るに及んで忽ち西に指す年数丈く一年其枝東に靡く弟子等の日吾師近日帰り来らんとて行く果して還来す此霊松も此せんや

後拾遺
須磨の浦や渚にたてる磯馴松志づえは波のかゝらぬ日ぞなき　俊頼

名倉塚　東須磨にあり由緒不詳

綱敷天満宮　西須磨の浜辺にあり菅公筑紫へ謫遷の御時此浦風波あらく暫く岸に上らせ給ふ浦人網の縄を円座として敷まゐらせ御安居しまゐらす此浦の風景を賞し給ひて其御像を摸して神躰とし崇め奉る一名綱巻天神ともいふ綱輪天神とも称す

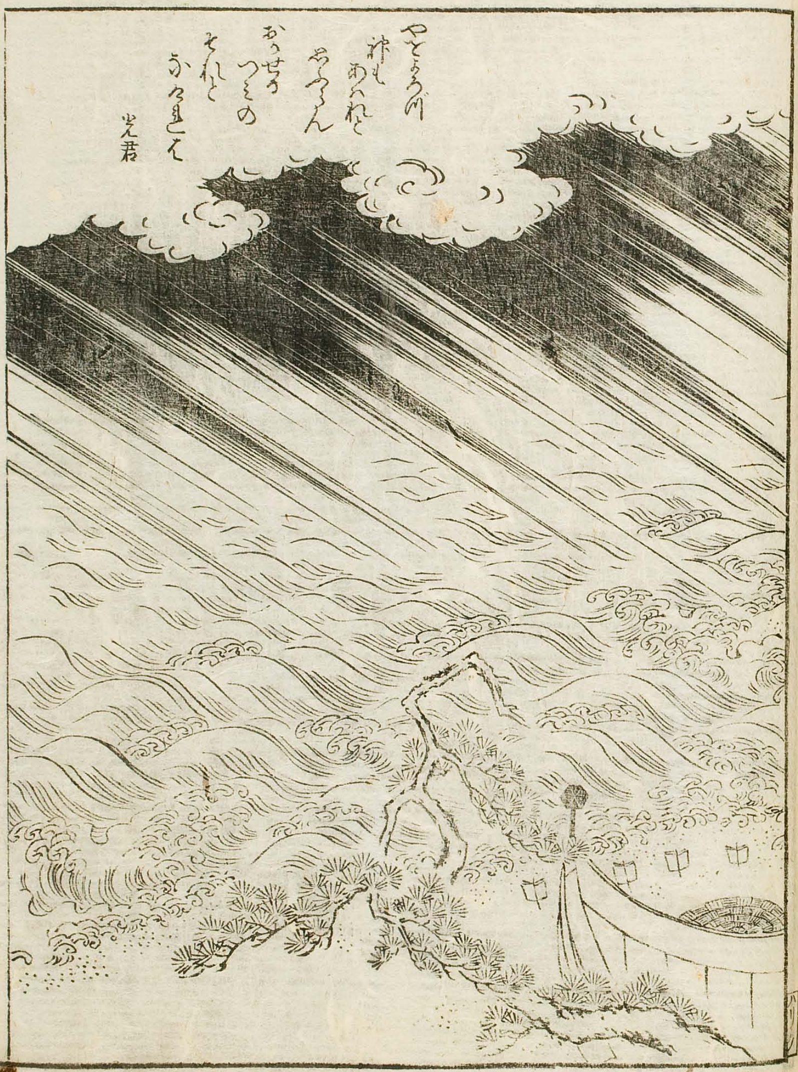
家集曰障子の絵に須磨の浦の歌書る神社に奉て行給の所をたちせる御てくらぬさゆかしよみ侍

なにとはおりさうらんつは海の神ぞ知らん　恵慶法師

白浪の心ふかくかみてたゞ世にうけよ神の此神　同

世に須磨記といふ書あり是を中に須磨記といへる橘季祐といふ者の家に伝ふるよし須磨記と記せりこれは今の村長若田氏が家にあるを称す此須磨記といへば菅神の御作なるよし世に久しく伝ふ或曰是は後世の作にして菅公の御作にあらず後世の偽作なりと其真偽の論は後考に侯く只文章のみやびたるを賞じてあらた引書とせしのみ

しらざりし
おほ海のはらに
ながれ
きて
ひとかたに
やは
ものはかなしき
光君
西村中和画


やほよろづ
神もあはれと
おもふらん
をかせる
つみの
それと
なければ
光君

須磨記

日暮にそこし程にあしきるうちけふの朔日しの年二月中旬、心くりなさ
みくとのうちをかしこゆうるおほいとの申とぞきこえ身にはあほけなくそおりに
御たいうちれいおやくしをなんとちにんそこ手思目かして右乃おとゞといへる
かひなくぬ高根君は雲井に昇りしの寅令なりみしうもあさはしき
まその。わか君んにあるなるにまる事に、かんさんなんちうたみやうのつかさの
うこやて、とやくのぬくにうけたうまくとのとうつさ○給へる事のかしこ
かうとなんさへて家を起し名の後れ世なんをとさみふりし、立の介せん
事らへの親に使うへまうまる、福ちけなるといへし、それしらその
本意といゝとなんや。ほら身のそれとと従なれ幸れいみしした。けと
托なさ君なうしろにおひろんむりしめたるひうをといへと、そのとを
うくめむ御くもあられ。恋うくのさのえいあるう子○ふう川さうして
あるうなる海にうかへと安んしもいふにをやこのきをふ思ひうけんあく
みけかうへし。文章得業の本生なと家のめいそくと、かけまくも

かしこくも、そのつかさきうとあし事をたりへつく今のさちふへおのつう
家人めくものをさへかう御うれつうさへかくをなくへあさ入御たに
なんおれひとをうる身のいさをしれうけきをしふせめくたくくもの
せうへんふやいおかんいちえんの御めくみを四ともみの給紙をし。大宰乃
翅子いひれ庭のひうえ川とひへとも、そのうゑうるを得とも海とをそむる
事の御いてうふくおへとるか御代におひはまる事のめみしくされたるなる
御し。さるに津ねくよ秋中の晩れいうとけなく蒲うの秀る事れあけく
してなんはうそ川る道へかしこ君るいひ恵うるなしとへとも。
うつその身にうる事のあと何しさ夢うくのさうひめもいへさらなうや。
東の雲を暗なんとも、せさるにも夜営をとへ侍しほさそくすうの国
事かる国の猪士の作うしうされなとへいくあう川さくい思ひいさうる事
あうんとやをるけれとも九五象いそれしう上中下のたくひあうあるん。
はら身の象手立の国うて、おやうしさ事のさらさのうちとういつる事。

人の思ひ侍のしらぬこと多く文にもいはれぬ。君の御くらゐにはあまた
身のつたなく志そく退きし。又は侍ることも。ありし御代に
身をやつしきこえしかしこまりもうけたまはりてなん。おなしのこる侍るに。
おほしかんな月の頃つかた。第七の御方にて宮の家に紅葉のえんに
こゝによりさせおはしましたりしかバ。なん立入らせたまひにし思ひかけぬさまにてなんことにて
あまたゝひ。えらせたまふにおもひもよらぬ侍りとも立のほりぬるつらさきこえあ
めるを幸とまかりし一と思ひをのしりく。それは家のうちをものと
いふとう。津をりの塵にまかりて。とてもかく侍りたり。左のおとゝの
きふきしたるをちらく物くにつけて目をとめ眉をひそめ侍るかたの。
松はやけあるぬれとあるやる。継母おほくれひ志らに身乃つみよと
さねてとふらひにもきこしめしてやさしうやらけるを世にあらきさん
と。人あさらふくさ世のありへしふとう弟をとりて侍る川さうしく人も
上中下とはとひめるになん。七のつゝ般へおけさせつる人騈正の尹のみや

より明法博士しるくあくさるゝ事れりしとかや。む祢とろ人さへ人臣乃家に
あけなくそあるへきやうかたる世あしあるへき侍しいふなんとあらし。あも
成てきこえんをはかりしおほよそもいたそけあれたる紙思ひさるけんそられしかなか
つきさあるへし。汚りとなてろに思ひへぬしく。わまれ多く白銅やうをとるみ
のかゝみ手うけりのしてそのあかなひ申きこえんまくかは川まろう人にも
おかしもらふにあやその後にあかしやうに持ちしれともさうなれとも
はなさくの御たくりのんな侍りをあたゝめいかく物をなり。九五のんなき幸は
あるかしに思ひかけりともおもいかね身のはかなさみなみの
事の多くにもいてかくるしうなりて遠近のさちをかゝのうち川ろい
家々に思ひりのして。此比の事たにをあはれし。ほとさ志そく居うて
あんしてう川ろいをへをし。身の志てうへをあんへくの文をこ二志か
ありつく名をのきてやうれ外史手侍しさうなるを名に楊梅の宰相
のぬしとあんうてて帰。あそひくてまふをゆかれかよりしわてう年比の

かる哥やうのことこのわかきみしかき事ども、ことにいひあらはしく
はなくさきとにまつりし事しけるなむ。むかしいつの月日ややうくし。
はかなきことかくこれ今度の身に思ひあはするもありていとしも
をちなる事ハかく佛身の中くを清きとたゞかなと思ひさうするも
あさましきゆゑそのいとおもひかなしくやハかりやかしまのすゞめ家のむすめ
このいとけなきさかれとかしこくも文字をそへけてさゞかの歌ともかくれ侍
くちふもさん。さしてもかきたるいまは我むすこわかくも此世乃人
ともおほくをわらんなるかな。人の御心つかひのいさゝかせゆゑ事あ
いともかしこくされとそのしはくさを清くつゝみぬしかはくふゆくさ
見なくんハ。おりてハかるなく。君の御おかとゝ人のよろこびさんと外のつかひ
つゝむかたのをかれくもてなんとおほやけせんしきそやかりせんやハかけ
あたハんなといふわか女をしふ清く孫てさへみつからもそことなるへきを
なれあとのむしあかゝるふのかくさんとそしつかうたとを任てうせん

策木賊

事の本くひあるへからんにつけて。さはわかさんのわかみさへゆきのうつかりかん。
白太まといへる男伊勢よりの年くとひ来り。我家のうしろへなる家居
うれ屋とりところとなんせしかは。ことにまた例のちきりきたる人をとして来
まるもいかゞ川流ひ所とさみの居ん事の中かあやまちくおかしきみ家と
ちかあんとくおもてしかとまうかれとうつろひとおるかへあのひちうる事
もありて。雅丹の常楽院の僧房ふうつろはせうりましし月ゆたかし
うつろひて。木の草縁とつけ庭ある暖と報して白太賓か閑流帯石沱
とゝそのせしもやのあさらにをしく。はくふたゝるいさとかてめをとらふ
ふそのおろむはこの那かる友に来りく。屋そくらのうちかくさめぬる
この句をたそうふ紙に書くとおしせあけたるを。ふとみにあらえぬ。
瀬花梢にまれかしそく宿よりも匂ひるなかうしくて。庭に清かれ侍
ふやさしく来むまるの名残花のなかしるを露とうくめかに御乃むまこ
なるふとこ縁を求くう紙に個をしと。とうてくまうりしさやかこ

にもおかしきをちにうつくしてかんじ給ふをあはれとおもひてさい川つとめる為た
身のいかぞうとよもきこえをみるに虫かゞ川と康成ありそ宰の
外だ。おとやうある事は世乃中なかしかゞはりあらさらんや。宴はいとく
せんかたなき住居のいへせんにうかく宰予ゞ孫人のとまみにのとこ鉄公志（論語公冶長篇ニアリ）
のくそかうえ。がくして秋風こさりてうく井梧萬天秋と吟じて。
御簾のうちれ萩の葉ちりちちあてそるもやうくさりくるう川ろひ
ここ後。夜更ては浩ちある中うにおぼえぬ。届のおとさりてらう旁間乃夕風。
砧の遠くうちうちひびく五條あたりの家さやかに秋のやとぞひ侍り
くかし。仁年がう爲うさくせ夜はいよしも物のうおもひやりたる。
九月の末つかたより政官の解状くだりぬるといふくしもれたる人のさえ
はりありてかんじ。左ては身のおくてり天道の志らもおろしむる事も。
かしこくも思ひとりねるに。霜月の中のちれ日解状ぞとふりてくう
左大弁かりし弾正尹丸志りへに候して侍るといひつてへ来りぬれと。

やうて本家に立帰りくそのうしこあうとうけ給るに。太宰権の帥ま
う川後は爲たよのみそのゝ滿ちしくもおぼしくも侍るは。鶯さくへしらく
いとうやくあらしぬ。おもしは居せのあらし治の立ろもむく法を
うらんと。つらあくの表にかの府にまゐる爲ささの弾正尹のいつかひあれは。
それにそとてうもつくあたやうあれとも。おもしはそのまゝりてのう川ろひ
訴に立帰りて表をや川うるのんなく隆をゞるあの本意さらんする中うた。
棟梁のうつそろく爲た身あらぬ事。心肝にもそちかなしくそ目穀
を送る事よ。年をそに朧とせあ来く。ぞたそへるいてとこの露もきく
みるとけ中にれあん。ささらふる日もむ月のせると解状さこは有りぬ。
そこて家門のむかしうらぬあにそれとつとふるもかしうましく
やはある。帥の正記かと官符にそへて弾の思ひて来りぬ。月ころうう
とみるか観世音の西朱雀ある正像寺のかてうらにおもとるにやさろう
のぬしあうくやしきまゐる

九重の上を出て行しもくさきをゆかしひかく世をやほくさん
ところどころあんりしこあり此あさ侍しき事おほかく侍へぬ第七の
御子も同じ外さく比羅に嫁しかなく敏け去く中川と申し小貪
家なん娘ほか中川申し寧のにはた御不幸なられしを忘へ來む〇
そこらいくやましく良陽が安産の倚子もゆかしうなかりぬから
してむまこれおかむら魚んと家門おそりて又いかにさ志とたるのし。
被も殺も見いさをし侍へ又とさてさ父を離別の日とおかしおん中さら。
あらしいかにそやかとしもく中の象とともの未上かる孫しもいひそ三年の
かい屋うかきれの旅にもまかさるくしもうつそのめく持さ事おかひて空に
あんかし年来をしくをと孫元卿かいひさるをあん雁旅のもとさ見と
して既にむつき廿日の宮四ツそうかにおんかとてせまとて紗とのさこの
使とかききせあとさく出て川る事よ。かりやひめ白たまのぬしと須磨と
いへ新中くとほとあひてあん。あとみへそうしのめのふつさふ

君が住宿の人をあへをゆかしくもかうてゆてふうへりのんしたや
それから淀川尻か江口といふ河瀬ありも来まりありともおりとぬなり
恩ひ来る川来紙おんかうく其のあとのおりれぬかをへかとくちた
と読へぬけさの庄といふ所かく知るのうまいなしてあん空う登く
都の山もみえんを於りめる事とかけくとさうへ於り
三好かいうしをやこの土居うしなさひへ面てそあるとも
かみたやの國あとも吹浦とおん今かたその三河がとていとあらて
そしやうにそこく津とへ数舟数いひさしたおまてひあうにあ京舟
本る世そうけうきんおとそらしら合くをの一ふさてひかへるうにありて。
五十年におしるけるか武庫吹浦かく西宮に侍しや津よる
さへめるに四方の山うしこの様ともかあくやまと来ますらぬ。かり屋形
こち例あくぬよしとをのもろに曲へ栄史生和氣の事氏のとも乃
せし弁も源にはとひめる代中の〇とそあん。栄の事侍うあひて。その

やよひつくめくるおこそりぬるは。ひとつのなごりへとりめくらし哥ぞ
あんひと川ぞ朗詠しつゝ西へ。おもち鴨もそろふ心ぞさとさく
ふきやけしらせし舟も須磨の関ちかつけくあん。濵山をたよし。
くらみとひふいろふ川のおきもまてかくされぬ面く。おとろく
しかりをかりて手川は浦ふとがらうして波くふ。いりせいふ
めのそさいつちらされくわざとさ幸孝とし。へ。ぬし友ふつき
めの日へえや夕日西ふかくやくとしもいわすらそとも。なとのひかりも
これゆくやうなとは。なふみれとせしゆるに蓍ちかうかり。そまる
上野の罡といへ出こ孫なふうし此寺あるよしふかく。譲さえこて
耳頭うるとひとのよほせう。とめくそこの世うかける橘季祐と
いふものとおく語うしかう哥ふありて。や川われかて浦よきさ處なる旅
も思へてへさきをある幸なと懐うめくふ

波頭雁路霞　萬頃涙涙譲
弁識播土澤　今霄辞雲仙

くちめうろきしくあてぬ。このけしきもこれかれはすてふあら海
のようそひきそゆるは。うらや姫をかんめのとある右衛門のさくそんす
をのしく。みやこまて〳〵かちよりとくりみしぬ。ゆくさかなき身てひ
のたいめんそうかゝさ。かの待めくさふ筆みしらされいをのしぬ

奥書曰　此一書加州金澤川嶋氏より到来して冩しとりぬ
右詳勝之御記也
右壺井氏以朱添文字令便覧也

前田氏舊蔵屋　西須磨の里長へ家譜とつたふるに往昔神功皇后の御時代ありしと云
傳ふ　然とも證詳ならず　須磨の家ふ寿齢
なく　あり其大略をこゝに記す
菅神自画影　菅公此浦に流され給ふとき御染筆とぞ　菅家須磨記の御筆　従二位實積卿
後陽成院宸翰　秀吉公御筆　大樹君御消息　和歌あり　弘法大師名號　自他
三尊弥陀　恵心筆　西行法師筆　一休和尚筆　一遍上人六字名號　元祖
上人の筆へ遊行上人巡国の時此家に入て供養に預らるゝ若より今に於て寄らるゝ　佐々木盛綱太刀　千寿院の作之　其外武器多し
三夕和歌　六条宰相有家卿筆　冷泉三位為久卿筆　飛鳥井三位為信卿筆　制札　瀧川左近　松永武蔵守　古證文　織田右衛門　津田恵閑

やまひつとめくるをこたりぬるはちとせつこのみをへだつるめうか哥枕

あんひさ川さ川朗詠しをくめくあまち鳴もそるふ見なとをろく

ふえやけしらせし舟も須磨の関ちうつけくあん浪山とたえし。

くもらかとりふもろ川のおちもまて手ながされぬ為くおとろく

しらめをかりて手川は浦ふとがらうしてほくふいうり來をいふ（雷）（祈）

ものをさへいつちこそれくなやうとさ年寿とし〳〵わし友ふつき

ぬる日へえや夕日西ふかゝやくとしも侍ら旅とも少さのひうりも

それゆくやうあさはあふされとせしゆくに驚ちらうなり。そまう

上野の里とらへ來こ旅なふうし此寺あるよしかく讀さえくりて

耳頭らさえひとのよ住せうぶともくそこの世うかける橋孝緒と（贖）（佑）

いふおの かよことさ爲ある旅

もやく

くち川 れぬれはすてふある海

のよそ の右衛門のさくさんず（志）

をのし 佇とめあふ身すてひ

のたいめんそうりかてさかをはゆきふさうる筆みしられたるをのしぬ

奥書曰 此一書加州金澤川嶋氏より到來して寫しとりぬ

右詩勝之御記也

右壺井氏以朱添文字令便覧也

前田氏舊屋 西須磨の里長に家譜とつたふ往昔神功皇后の御時代より家名相續を須磨記の橘季祐も先代おりしと云續ふ然れとも證詳ならす須磨家に蔵まくあり其大略をここに記す

菅神自画影 菅公は浦に配せられし時の御染筆也と云

後陽成院宸翰 秀吉公へ御筆

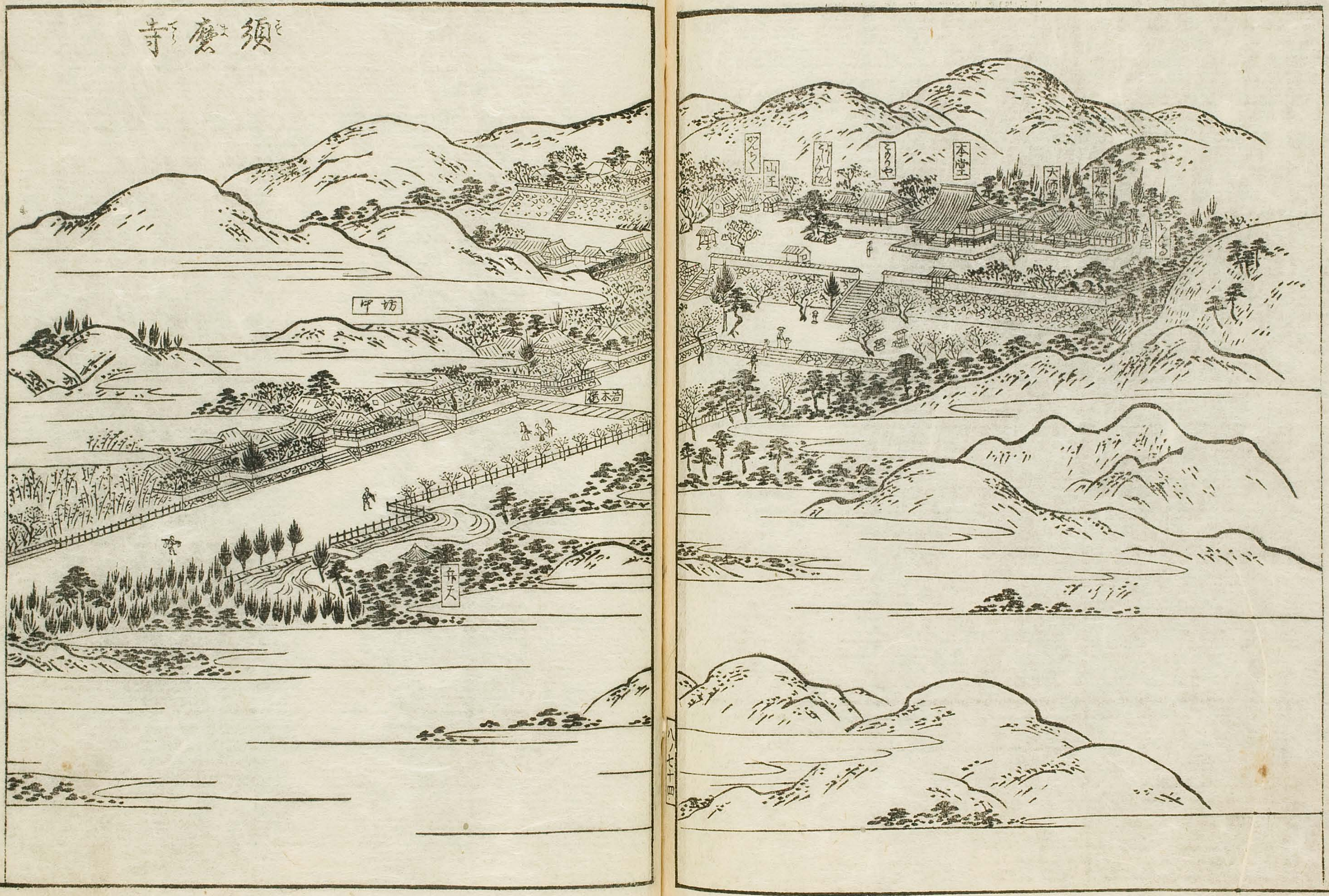
菅家須磨記 従二位實積卿の御筆

三尊弥陀 恵心筆 西行法師筆 大樹君御消息 和哥あり 弘法大師石場 自他

一休和尚筆 一遍上人六字名號 えん祖

上人の筆ハ往行上人巡國の時ハ此家に入て寫さん供養ハ頼らるゝ者より今に於て家ふだ 佐々木盛綱太刀 千寿院の作之 其外武器多し

三夕和歌 六条宰相有家卿筆 冷泉二位為久卿筆 飛鳥井二位為信卿筆 制札 池田左近 松平武蔵守 古證文 増田右衛門 津田恵陶


須磨寺
坊中
若木桜
弁天
山王
本堂
大師堂

事代主神祠（ことしろぬしのやしろ） 西須磨前田氏後園にあり 傍に古松あり 高数丈 又神功皇后御社あり むかし 皇后三韓退治乃時 御凱陣に此に立寄らせ給ひ 出雲国より事代主命の神託によつて 爲しと謂ふ あるひは前田が祖先出雲よりきたれる時 勧請なりとそれより 今の長田神社に遷しまつると 家傳にあり 其證今に遺りて前田氏 創業なる此家より神輿の供奉す 次に生土六ヶ村より當郡 氏を客家と称し ゆゑに大神事として来りて 前田氏の内東尻池村境の松の下を御旅所と定め 此所へ前田氏 神輿を迎へて請取 同郡野田村の浜まで長楽といふ 所迄神幸の式あり 其時藁人形三千三百三十三を 拵へこれを散々に伐ル 是三韓退治の真似といへしへとぞ 前田氏井戸荘下ノ荘中ノ荘の三荘を領しけるとなり 今は西須磨の村形也

菅之井（すがのゐ） 同所前田氏の前栽にあり 清冷潔白にして炎暑も損減なし 菅公此浦に泊らせ給ひし時 此家の主御船へまゐりしより 御感涙ありて 御自画の御像を賜ふ おかに名くより今の 前田氏此名を家名として門にて酒を造る 是菅の井と號を

菅の井といへる名酒を賜ふ侍
もとは傍に有りし村前田氏より

菅の井を汲むもつきし大宰の君の神の恵みに　湘夕

頼政薬師（よりまさやくし） 前田の西須磨寺の入口にあり 寺號を浄福寺といふ 本堂の傍に薬堂あり 近年再興す 此寺も前田氏の抱所なり

本尊薬師佛 聖徳太子の御作 長さ一尺 脇士十二神将あり 尼崎領主青山侯の寄附なり 此地はむかし

諸堂巍然たり次广記に上世の墨とい所なりしにかく
後さんかりく耳頭をあらひを得せりとしか此寺の事とをも其後
破壊に及ひし然久寿の比源三位頼政卿興せり故に名とし次
例年正月放鬼踊といふ事あり追儺のぬくなる鬼の形をして
村民ともにをどり

重衡松

狂へあり
薬師堂の前にあり本三位中将重衡卿は平相国五男にして
宗盛知盛舎弟也生田の副将軍なりしかども軍敗して
此所まで遁のびたまひしが終に此松の下にて虜れ給ふ讃云其時
里人御余波をおしミ濁酒を捧けしかバ
なん添しゆへと云云
さゝなみや波こそ寄るゝ都なるしたてのむしろそふぞり酒なれ　重衡

平家物語云
本三位中将重衡卿ハ生田森の副将軍にておはしけるが其日の装束にハ
かちんに白く黄なる糸をもて岩に村千鳥縫たる直垂に紫すそ濃の
鎧着て鍬形打たる甲の緒をしめ金作りの太刀を帯き切斑の
矢負滋藤の弓持て童子鹿毛と云聞ゆる名馬に金覆
輪の鞍置て騎給へり乳母子の後藤兵衛盛長ハ滋目結の
直垂に緋縅の鎧着て三位中将の秘蔵せられたる夜目
無月毛に乗られたる主従二騎助船に乗らんとて渚の方へ

落行所に庄四郎高家梶原源太景季好敵と目を懸鐙を合て
追懸奉る渚に助船共多かりけれども後より敵ハ追懸たり乗べき
隙もなかりけれバ湊河刈藻川をも打渡り蓮の池をバ馬手に見て
駒の林を弓手になし板宿須磨をも打過て西を指てぞ落給ふ
三位中将ハ童子鹿毛と云聞ゆる名馬に乗給へりけれバ屈強の馬共
容易追付べしとも見えざりけれバ梶原よしやと遠矢に能引て兵と
放つ三位中将の馬の三頭を箆深に射させて弱る処を乳母子の
後藤兵衛盛長ハ吾馬召れなんとや思ひけん鞭を打てぞ逃たりける
三位中将如何に盛長何れを捨て何くへ行ぞ日来ハさハ契らざり
しものをと宣へども空聞ずして鎧に付たる赤印共撤て捨て只逃に
逃たりけれ三位中将馬弱りにけれバ海へ颯と打入給へ身は
投んとし給へども其へしも遠浅にて沈むべき様もなかりけれバ腹を
切んとし給ふ所に庄四郎高家鞭鐙を合て馳来り急ぎ馬ゟ

中将重衡ハ須磨浦にて源氏の武士ニ生とられ給ふ

三位中将重衡ハ生田の合戦敗れて西をさして落給ふ所より庄四郎梶原源太景季など追かけ遁す生捕らられ給ハん捨て後藤兵衛盛長ハ逸足して逃ふ逃るハ主君の先途を見捨て我命を全ふせるハ剣を抜て其君を弑するにも比せんや

友汀画

飛で下正なり何くとも御供仕候わんといふものゝなかりしが我等ハ
かゝる馬に搔乗途に生捕まり鞍の前輪に結付奉つて我身ハ
家将に参て味方の陣へ投入にける乳母子の盛長ハ其とはなん
なく逃延て後ハ熊野法師の尾中法橋が憑て居たりしが
法橋死して後後家の尼公の訴詔の為に都へ上るに伴して上りけれバ
窒憎や後藤兵衛盛長が三位中将さしも不便に思ひ給ひしに
一所に如何にもならずして思ひ寄ぬ後家尼公の伴して上るよ
とて皆爪弾をぞしける盛長も流石恥しうや思ひけれん扇を
顔にかざしけるとぞ聞し

されバ監物太郎ハ主君知盛を助け知章の先途をみんて命を忠に換
て美名を萬代に揚る後藤盛長ハ主君虜と成をみてかなく逃延て命を
全うし悪名を後世に汚す節の高渠彌且ハ君照公を弑しなるも
盛長に比せんや君子成人之美不成人之悪小人反是といへるの誡なり

上野山祥福寺 西次广上野にあり街道より松原二町を經て楼あり それより二王門に至る風流の構也之 古義真言宗

本尊聖観音 海中より出現 座像長三尺五寸 和田御崎の

護摩堂 不動尊を安次 本堂の東にあり 鎮守祠 熊野権現 王置権現

神功帝釣竿竹 本堂の乾にあり漢竹と 弁財天を祭る 義經腰掛松 本堂の西にあり 樹る生田社にもあり

馬盥額 中門に揭る 上野山と書次 二王門 金剛力士の二天を安次 運慶湛慶の作

十王堂 あり 西山入口に 什寶 数品あり大概を あくに志るす

敦盛赤旗名號 法然上人筆 為敦盛室頼隣清菩提書之源空 脇に和歌あり壽永九世にあそくる為てたつねく弥陀の蓮にともにまうく

保呂衣名號 蓮生法師筆 脇に和歌あり 法のみちをみと観て書ども心行見足るは弥陀佛力

敦盛幼お手跡 題座の字 青壽丸 よしやたとえまでも又かくさまんおのまゝかたた座の白雪
寄松祝言 青壽丸 つたぎりある松に千とせの久しなくも久しかれとや村の山風

敦盛画影 熊谷直實筆 敦盛鎧 高麗笛 學祐僧正ノ作

青葉笛 弘法大師の作 ふうみども書にきこへて笛竹のよしれむかしをおもひこそやれ

寺説曰當山の寶物ハ貞享年中江府芝寶蔵寺より当くに贈納しあるて
又備藩常山先生東行筆記曰今須磨寺に敦盛の笛とて傳へられとも

笛も父經基の方へ送りおこしたる事盛衰記にみえたれバあやしき贋物にて有けるとおぼえけり都の寺院にハ此類多し

若木櫻制札　辨慶筆

須磨寺桜

此花江南所無也一枝於折盗之輩者
任天永紅葉之例伐一枝者可剪一指
寿永三年二月日

此花江南より梅の制札之詩話曰在江南寄梅花一枝詣長安又云 江南何所有聊贈一枝春 又云 北人江北望不見隴頭梅ありとあれバ此制札も隴頭梅などにありけし若木櫻の制札といへるハ辨慶の大ひなる事なるべし 又筆意も所謂なり 辨慶ハ三塔かくれの物識しる人これ加合ざるべし

嫩木櫻　持堂の前下段の地にあり源氏須磨巻の言葉によりて號く樹並しなるべし

須磨巻云

すまにハ年かへりて日ながくつれ〴〵なるに（源氏君廿六才）植し若木の櫻ほのかにさきそめて空のけしきうらゝかなるによろづの事おぼし出られてうちなき給ふおりおほかり二月廿日あまりいにし年京をわかれし時心ぐるしかりし人〻の御有さまなどいとこひしく南殿のさくらさかりになりぬらん　下略

家集　　定家

櫻花ちる世の事にて捨くる須磨の関屋の跡やかはらん

夫当山ハ洛陽を去事十有餘里にして須磨里大悲の霊跡なり後にハ群巒を擁し前にハ潮汐を湛へて緑波天に接し漁舟商船或ハ王者の樓船来往し簫鼓の声棹歌の声白鷗能鷺の磯の波にうかべかられ其風光妙にして筆舌にも及びがたかりし　光孝天皇の御時海中夜毎に光有て雲端を照す漁父網を下しけれど栴檀木の観音を得たり昂小字を建てこれを安置す其霊應いちじるしくて祈ればハ功験あり信ずれバ示現あり因茲朝廷に達し仁和二年文鏡上人に勅して寶殿を営み丹青爛絢として林岳に照映し遂に梵刹となる事今に至て八百餘葉なり厥后久寿の頃源三位頼政ちにこゝに帰依し殿堂支提鎮守等を造営して煥然として一新す故是山川ともに勝景盛益織なり世に須磨寺と呼て往来の貴賤すべて消せざるといふ事なし

須磨上野　須磨の里北山側にあり 田園をいふなるべし

新千載
沾かけぬ須磨の上野の露にさへまた紙ほすゝ旅衣かな　津守

支考
鈴舟のよそる声やさへづらん須磨の上野に雛子鳴く　旅昭

後（うしろ）の山　須磨の寺 上野より北の山を凡て後（うしろ）の山といふ 土人の稲葉山といふも此中にあり

煙いと近く立たるはこれやあまの塩やくならんとおぼしつゝ
おはしまうしろの山に柴といふものをふすぶるなりけりめづらかにて

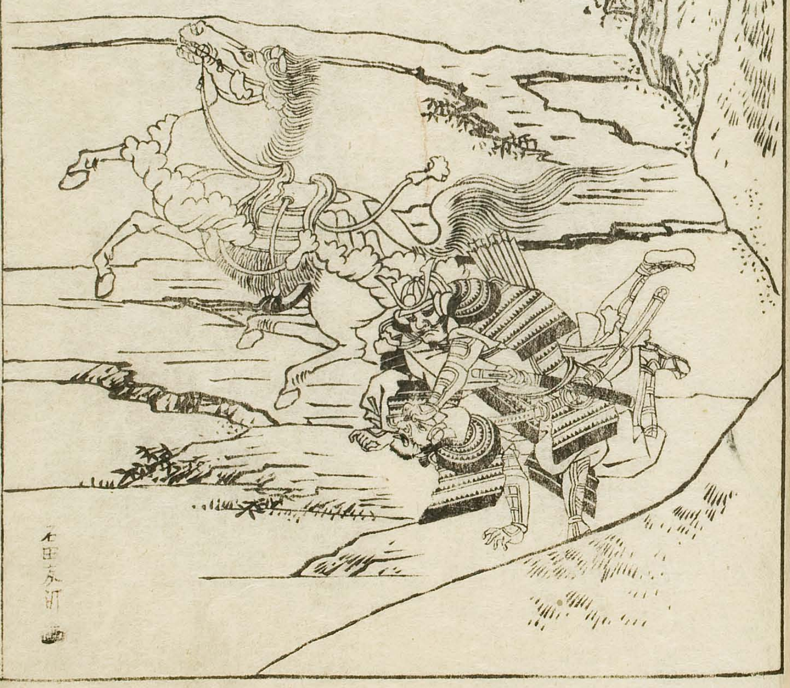
源氏君
山がつのいほりにたけるしばしばもことゝひこなん恋ふる里人

琴
冬になりて雪ふりあれたる頃空のけしきもことにすごく
きんをひきすさび給ひてよしきよにうたうたはせ大輔よこぶえふきて
あそび給ふ心とゞめてあはれなる手など弾き給へるにものゝ音どもを　惟光
やめて涙をのごひあへり　下略

支考
月出るうしろの山の雲もれて須磨のいほりに近き浦風　家長

千首
さすらへのおもひよりしと柴の庵れうしろの山に名つけにけり　為尹

越中前司盛俊は平家軍将の中に殊に勇力人に越え六七十人力ありといふ関八州の大力猪股小平六と撫くおさへ既に首とらんとしけるを猪股壽（たばか）りて命を助て盛俊を討しく平家の運の傾くきざしなりけん



石田友汀画

光源氏旧跡

須磨寺の西南に源光寺といふ西本願寺の末派の道場あり。此地をいふ源氏の旧跡は作り双紙なれば古跡のあるべくとも思はれねど、按ずるに西宮左大臣の謫居の地は實は現光寺なり。永正年中の建立の道場とぞ。什物に陣太鼓あり。

芭蕉翁句碑

源光寺門前にあり。近年豊後俳士芳蘿坊なる者建る。

見わたせはなかむれは見れは須磨の秋　はせを

風月庵似雲跡

源光寺境内に旧庵遺れり。此人此浦に塩竈の絶えしを歎き再び興さんと計りたるとなり。

月にふけ須磨の上野は秋乃風尾花の波にはまく浦浪　似雲

近世畸人傳云、僧似雲始の名は以雲、安藝國廣嶋の人なり。斉藤好之が家にありて名山霊地をたづねしこと多く、儀同三司實陰公に学ぶ。いと浅からぬゆかりありて、住所を定めざれば世に今西行といふ。歩をて自も

西行に姿斗は似られども心は富と墨染の袖

と詠まれたり。此上人の墓所さだかならぬを歎きて、石山乃救世菩薩に祈て其霊告によりて河内國弘川寺にて西行の墳を見出して、其よしもさとらなりざりしを石のしるしと建てて、其寺に有る肖像とも模し出して堂を造立し、顔も山中に庵を結びて住り。花の亭といふ。其時の歌に

並ならぬむかしの人の跡とめて弘川ちかくすみぞめ乃袖

その庵のひろさ纔一間二ひろに過ざれとも人となく今かしひろりよといひたれは

我庵はさもさゝめになり雲の立居さへならぬ宿としそ思ふ

此山にあるほど又いろとふきしき人住り。附は樒鬘といふその二ひろが香の世くく一日の絶に芳飯炊く茶ど除た本所とて茶袋になまさ法らか栽させて後、訢乃山人へやきとて石に彫るうし。

折隊くあるにわらほどな山紫に浦し傍橘の下枝なりとも、須磨の浦に有る附久しく絶たる塩竈が興しらく志ほやきそする中ゆく（是延享四年卯正月十五日と自記に見ゆ）

絶てひさしき烟の煙立くり着にうきせむ塩竈乃うら

志ほ垂れし昔の人そ知なく汲てしるきや須磨の浦なる

我再興せし塩竈も又なくりの絶待り名れそ故になつ

身に餘りしむ又とりを為にやく汐の煙も絶し須磨の浦風

あるし山のふもと大井の川辺より弘川と同じきさま乃庵を結ぶはくる

住みし秋はみちのさうれ山寺はよしのく花れ下庵

よしの苔清水の奥に志なし住みる跡あり。其外高野の奥、龍門の瀧の辺なども世離れし所々に住るおりむき其自記におりひ強くさの延草などに見ゆ。八旬に余りて和泉國尾乃弘川に村氏に身をよせてそこに没す。體は遺言しく高野山にほむ。おなる西行と同じ、さ後の墳を築く著を訢右の二記の外似雲聞書と題しく儀同公の御説をたくとふに書つけ又ものあり。雑話も侍し耳底記の体になりつる鬼葛城(?)百首といふものは弘川に有く、よろ不なしく信仰の人棒た

須磨浦江

古は源光寺の西にあり。今は田圃となりて名のみのこれり。すまのいりえ、なりやえにしら次下略のほせり其のから

万葉 ありすまの浦うら江に生まれ落られ身に物思ふかな
六帖 浦の江に深かくらする藻塩のうたくさそ人は恋しかりける　読人しらず

須磨関屋跡

延喜式に出 古跡源光寺の西街道の左右に一堆の壟あり是なりとぞ

玉葉 あはぢ島霞にみえつらぬ雲もとの関屋に附なきにたり　家隆
続千 旅ねの夜はさむきの関屋の板びさし洩り月も光とあけてけり　定家
新古 須磨の関屋をとなさぬ波の音さへひもよふて霜をかりけり　慈円

千鳥川

関屋の旧跡の西にあり 一説関守川又路守川又攝津志に古跡ニ遺邏渓と称す 何れか其是非を知らず 兼昌の古歌によりてたれは千鳥川なるべし

金葉 淡路島かよふ千鳥の鳴声にいく夜ねざめぬ須磨の関守　兼昌

村上帝霊蹟

千鳥川の西端にあり 上に小祠あり 天皇の尊霊を祭る 土人云むかし太政大臣藤原師長は琵琶の達人なりしが渡唐しける此浦まで来りたまふを 村上天皇梨壺皇女の霊魂現れ是を止め 絃上の名器獅子丸といふ名絃を携へ 龍宮より妙手を授けしゆへ入唐をとゞまりたまふとなん 謡曲の絃上と謡ふは是なり 其證詳ならず

蛇窟

村上霊趾の奥にあり 此辺に摂津に所々にあり 昔こゝに大蛇ありしとぞ 一説云 源氏の君巳の日祓しまへ所へと

一谷

西須磨の村より北に十町余にあり 谷の広さ二十間許 高サ十二間 谷口より波打際まで十町余あり 此谷の奥涼しくして霖雨の時は流水あり 夏月夕立の時は流の中に鉢多く落来って里の数みなこれを拾ふ 一説云 源平の旗の色今に西の方は赤く東の方は白し 渓川の真砂の色今に残れり しかしは是地理の奇なるものなり

それ此一谷は古戦場にして世に名高く平家廿餘年の栄花も一瞬息の間にして寿永の暴れ風に驚されて今は名のみ残れり 其昔は源平躑躅のごとく赤く白く花咲みだれて軍馬の旗をなびかせ 疑ふ蓑は磯辺に飛びかふ蛍かとあやしまれ 鉄騎火花をちらして攻戦ふ分野秋の木の葉を柳散るがごとく 波間にゆられ漂ひし平氏八島の浦へ落足して船にのる 伏兵雨霜の剣するごとく嵐にしらぬ吹きまぎる玉なりとも 逃るあり追ふあり 岩の肩に膝をかしされば蛸の井坂 魏の赤壁に比しくらべても険要の地と以くとも帷幕の

籌策に羅く義臣も古く小喪び功名も一時の叢となりぬ古へ於
るむ人をさへもる聴ひく懐旧於述古戦場をとむらふも
あはれなり

浸氛一抹紫微星　海岸忍留舟輸青　邦美
冠蓋春寒風度谷　劍瑣雪暗夜过庭
鄧軍蜀嶺九天下　宋主崖山幾月經
赤幟光消空返炤　無人對酒泣新亭

内裏蹟　一谷の上にありしも次广の上也といふ古松二十本許ありしく安徳帝行宮としく
今方四町計官家より　不毛の地となれ一谷の城墟なりく
和稱する地之とぞ

礒懸松　一谷の半腹にあり迫年古松は枯く今は植継あり
古松の株於伐く額板とし荒田氏の砦に掲る

鉄拐嶺　一谷の峯於いふむかし樵夫有く多力なりく岩に
拐於携へ山中に入られより此名於附へ此嶺より攀まで
と坂落し岩石おとしの名あり　義経一谷於攻落されし
より名とせり

登鐵拐峯　二絶句

鉄騎三千雲蔽山　翠華一去惨龍顔　邦美
艨艟赤幟春風色　留在夕陽松嶼間

又　同

古塁鳥啼不見人　嶺雲澗水共傷春
誰知夜半風前笛　吹落梅花作戦塵

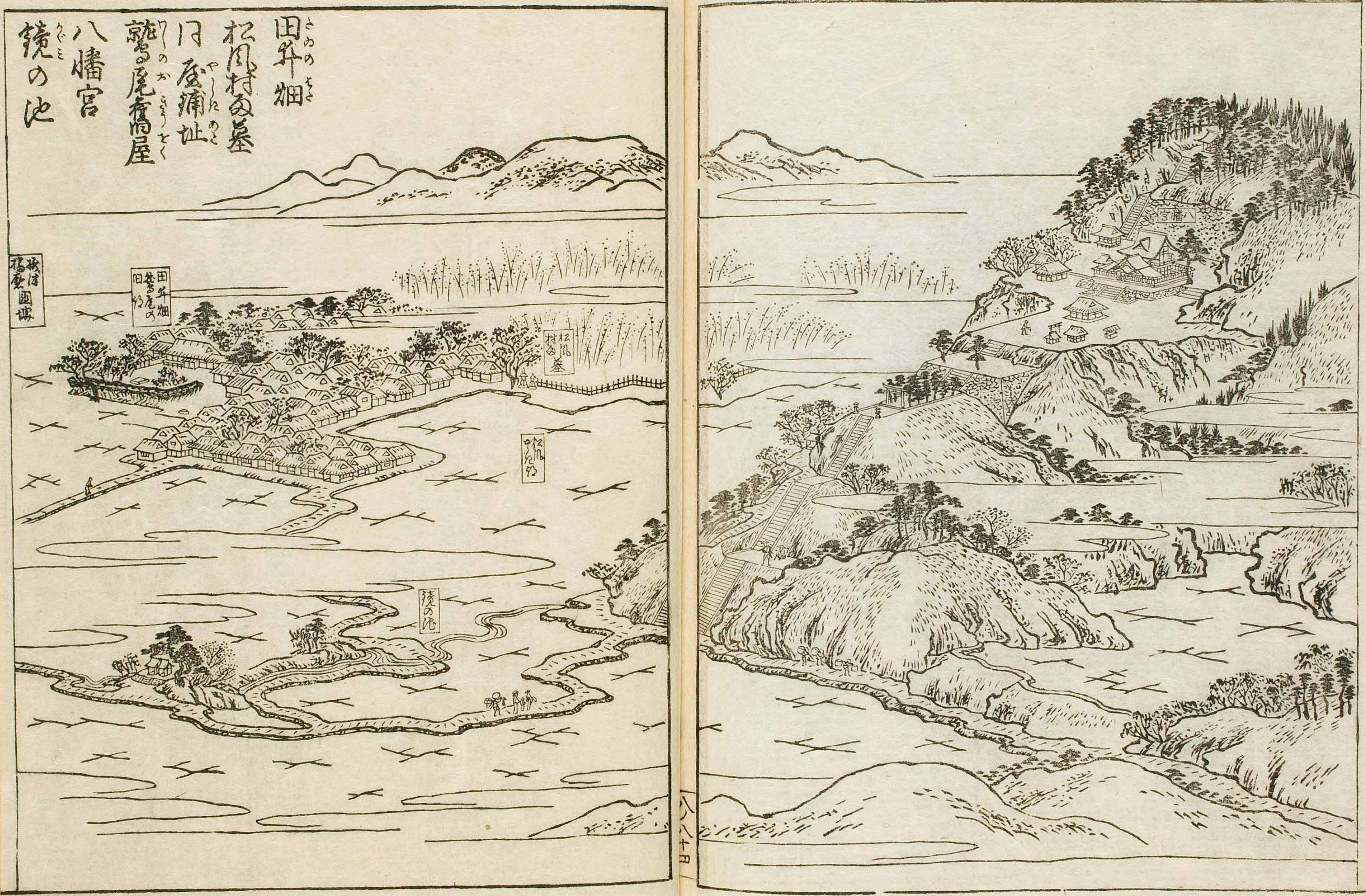
鵯越　鐵拐嶺の北にあり本道を去康より丹生山田郷藍那村於經く一谷
播州之堺の注還ん九郎判官度三草山より葡遠に鉄く一谷
攝津にも通ひかし　道嶮岨なしく

二谷　一ノ谷より西三町にあり　谷の奥凡町　横巾八向　高サ廿九向
谷口より活おの際なく凡十五町餘あり

三谷　二谷より西三町にあり　谷の奥弐町余　横巾十九向　高サ廿九向
谷口より活お際まく凡十五町余あり

鉢伏山　三谷の上をいふ　俗傳云神功皇后兜の鉢於置て此山に埋むとぞ
此峯より播州の浦々淡路嶋山手にと鮮かしく眺ゆ

熊谷平山一二懸　二谷の西なり　熊谷平山攻にありろら熊谷父子
の活お際に於て先陣於せんとく田井畑といふ古道於經く一谷
若もせんとく西木戸より寄よろうろ城内みえ驛て在りく
次郎直實子息小次郎直家一谷の先陣なと名来る大音聲上ケく武蔵国の住人熊谷
後より二騎つゞいく来る平山武者所季重成田五郎と
若ふあれり熊谷に魁せられ無念の体
平家物語に見へたり


田井畑
松風村雨墓
旧屋鋪址
鷲尾舊屋
八幡宮
鏡の池
田井畑
鷲尾の旧跡
松風
村雨
墓
八幡宮
鏡の池

敦盛石塔 三谷より西一町にあり五輪の形に梵字あり高さ一丈余
それより下にも土中に埋まりてありしを 此塔實は鎌倉
北條西園寺入道平貞時平家一門戦死冥福の為にこれを建る所なり
後の代より敦盛塔と称し今は世俗みな敦盛
と称しく往来の旅人追善として石を積塔を建て菩提を
弔ふもの多くありとかや

平家物語云 太夫敦盛卿は修理大夫経盛卿の三男にして十七歳の時去に
落足して沖なる船に目をかけ馬を海へうち入て六段ばかり游せ
られしに後より熊谷直實追かけ扇を揚て招かれて取て返し
波打際にて組で討れたまひぬ首を包んとて鎧の直垂を解て
みれば錦の嚢に入られたる笛を腰に插れたるあかつき此曉一谷の
城中にて管絃したまひつるは此人々にておはしけるをとて大将軍
の見参に入られたり又盛衰記には敦盛の尸骸を父のもとへ直實
送りきしたりといへればここに埋まるにはあらざるべし然れども
年久しく云伝へたれば世俗に従ふも可ならん

敦盛石塔　　一休

昔斯地有戦場　名流血涂残嫩木櫻
須磨浦風散花夕　恰如熊谷打敦盛

青る絶ぬ青葉のみえしまゝし竹　蕪岩

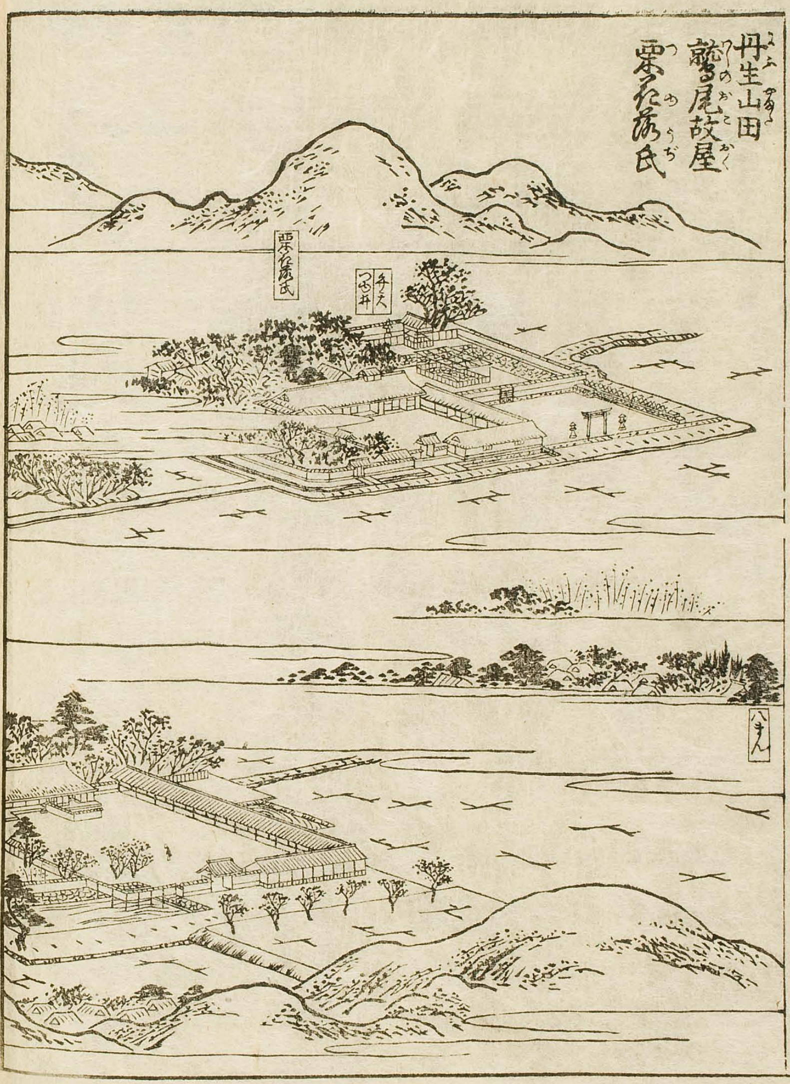
蛍火やまよふく扇れ風乃おと　衆雲

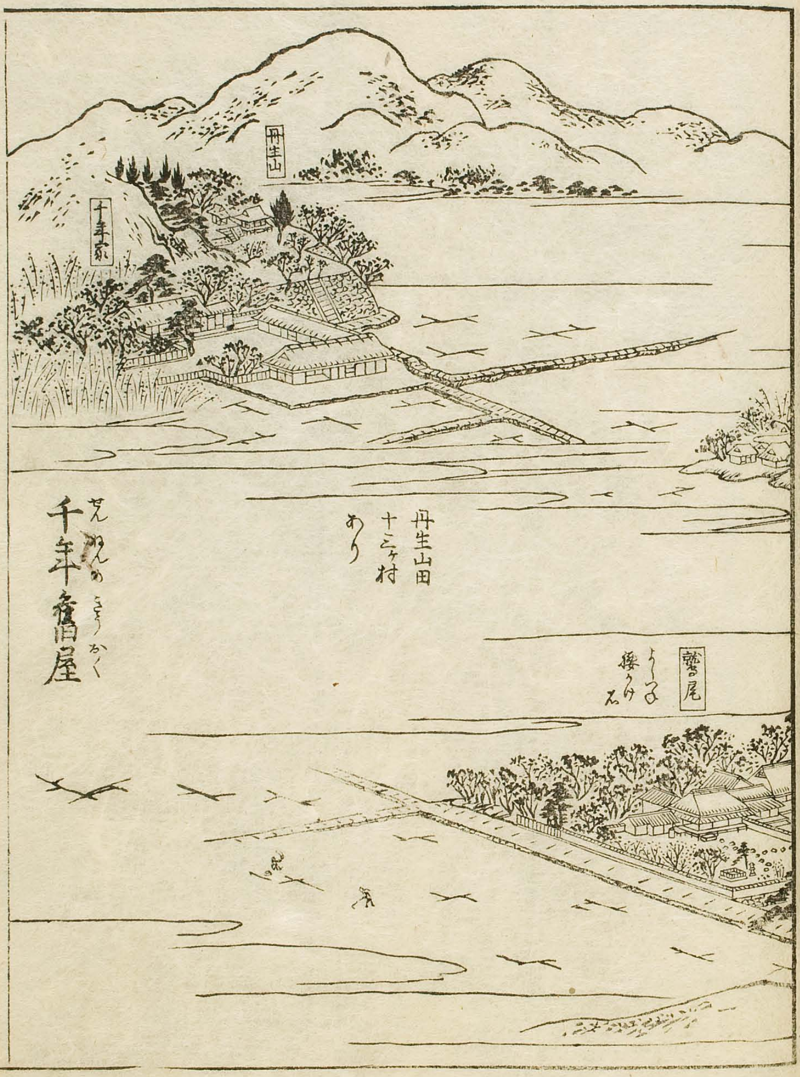
界川 三谷より西五町にあり つねは陸につゞきて海中に傍示あり これ
攝播二州の国界なり其傍示の頭に据置ける所なり此辺
潰洛山を境とし海上潰燭の界なる也此川御道を
貫きて西は播州塩屋村へ八町

火峠越 次戸より古井畑へ越る峠をいふ寿永合戦のはじめ桐圖
の狼煙を上げしより此名あり又田井畑嶺ともいふ

古井畑 須磨の西北の山中なり次戸より五町これ播州
界村の方ゟ玄奥より入る登る村の間に續く山中へ入此田井畑を
へ磨く播州へ出るこれを
古道越といふ

松風村雨二人墓 田井畑の村中にあり此地の字を畑宿といふ古老云
むかし此所の村長畑宿の娘姉妹ありしはなはだよく
ありし次戸の浦へ潮を汲に通ひし時左京行平卿二人をめされて
松風村雨と名付給ふの卿帰洛の後思ひに堪かね終に身まかりぬとて
供へて今も海濱の潮をくんで米を奠へて考へ合ば此所の潮汲水をそゝぐ
これにて其比も此山民塩を焼つる業ありて日毎に潮汲ある
歌舞の調をあらたむ
古今に云


丹生山田
鷲尾故屋
栗花落氏
栗花落氏
八まん


丹生山
千年家
丹生山田
十二ヶ村
あり
千年舊屋
鷲尾

田井畑八幡宮 田井畑村の入口北上にあり此所の生土神とす例祭八月十五日 又多井の下十歩許薮の内に土神乃祠あり

むかし此田井畑を鄙さし
ま帰の小祠ありとぞ

鏡池 八幡宮の下半町許西にあり 蔬云松風村雨あくみて鏡台
見とく髪をなでしといふ

田井畑鷲尾旧屋 田井畑の村長に鷲尾次郎兵衛といふ者あり
祖先一谷合戦の時九郎判官を鵯越の嶮路に
案内して其旗の中之旧記
と系図とも其證として其家に

兜鎧 其附の鐙鎧しるしに
兜は筋甲にて鍪形に獨鈷の彫物あり 鎧は胴六枚札にて左右に同所懸緒の
後の方之又引合せの上に黒漆覆背板あり長サ八寸押縄の板より下
散の裳まで之れあり 紺絲威は紫系にて裳は紅にて華を
茶平革小にて縫其外とも菊花の摸様あり 又喉輪佩立
等もこれあり

空穂 鷲毛作れり 征矢十六筋 根は雁股鎧通しの類なり

丹生山田荘 其庄より西に四里許山中に十三村あり 所謂
衝原 東小部 上谷上 下谷上 原野 藍那 中村 坂本 東下村 西下村
あり 再度山越 西小部 天王越 鵯越なとの小河等あり 其庄より往還三條

丹生山明要寺 同荘にあり 此山高嶺絶壁にして坂路嶮し 谷
の源より半数十間其北巖に傍て水槽を架し流を通じ槽の長サ六十餘丈 風景奇にして下流は衝原
村に落つ 播州に入る 當寺むかしは大なる寺にて 諸堂巌重

なり 天文年中に荒廢す 古義真言宗京師三宝院の末派
智勝院 舟井坊 大光院 尾崎坊 これを守る

本尊十一面観世音 當山開基は欽明天皇の御宇百濟國
聖明王の太子童男行者と云人本朝へ
赴かんとて銅船に乗て赤石の浦に着岸を附に鬢髪に
尊像載きさる老翁忽然として来り汝は日本に有縁の地
あり 是より丑寅に當つて名山あり とく〱獨鈷を投ら給
童男行者これを暮ふて此山に登る時に紫雲たな
びき音楽空へ花降る 其名茶札渇仰し其時老翁忽ち大悲
の尊像と現れ光を放つ 童男其佛を安置して彫刻して
本尊と作し
まりける

十王堂 中尊地藏菩薩 脇士に十王を安す

鎮守 山王権現 牛頭天王 大織冠を祭る

護法善神祠 安置す 本地大日如来と

大師堂 弘法大師を安す

鐘堂 護摩堂ともいふ 其外客殿厨等あり
余は志た畧す

安養寺 同荘原野村にあり 真言宗 醍醐三寶院に属す

本尊大日如来 佛工湛慶の作 脇士二天を安す

鎮守天王祠 此所の生土神とす 傍に金鼓堂あり
勅日 長禄二年 鑄

八幡宮 同荘中村にあり 生土神とす 例祭九月十一日 長徳元年
五月十六日 防州基燈法師に神託ありてこれを勧請す

又香雅院御宇保安四年六条判官源為義再営故に世人六条
八幡宮と称す次其後足利将軍旧記によりて神領を寄らる
寄附状あり上梁文曰明徳元年四月神官林盛安葺修
又云永正十年十一月栗花落氏重修界内に神宮寺あり
圓融寺といふ又文正元年鷲尾綱貞建立次寺に弘安
正応年間円宣文保貞和中の喜捨文あり又神祠あり
上梁文曰応永三十年二月重修

大歳神祠 同荘東下村にあり丹生谷十三村の生土神として例祭ハ
共に次界内に天満宮あり上梁文曰貞永元年四月
洛陽よりこれ勧請を又曰応永四年六月修補又白川
村に此祠あり永正十六年の旧記に蔵む

丹生谷鷲尾旧屋 同荘東下村にあり伝曰判官源義経院宣を以て平家一門追討の為に都より
三草山を攻落し鵯越一ノ谷の城郭を不意に落さんとて
至りたまふに山路嶮岨にて通道しれざるゆく案内者として
此所の鷲尾義久といふものを召れて義経此を視
給ふに勇猛人に勝れ是よりかゝる次特に鷲尾諸家の剛
勇なるものゆゑ勝利の後義経の義をとらく山路魁将の案内着
として勝利の後義の一字を賜ひ義久と号し太刀
一振鎧一両馬一疋并領次国日の丸の陣扇を賜ふこれ
より今に至るまで家紋とし此武具等ハ義久生涯
随身しく奥州へ落りゆくや今なし勿論旧記
等も紛失しくき證とすべきものなし家に伝来次
弁慶の太刀亀井六郎が太刀あり此二振の太刀ハ義経に
小従ふ時分より贈らるゝならん也

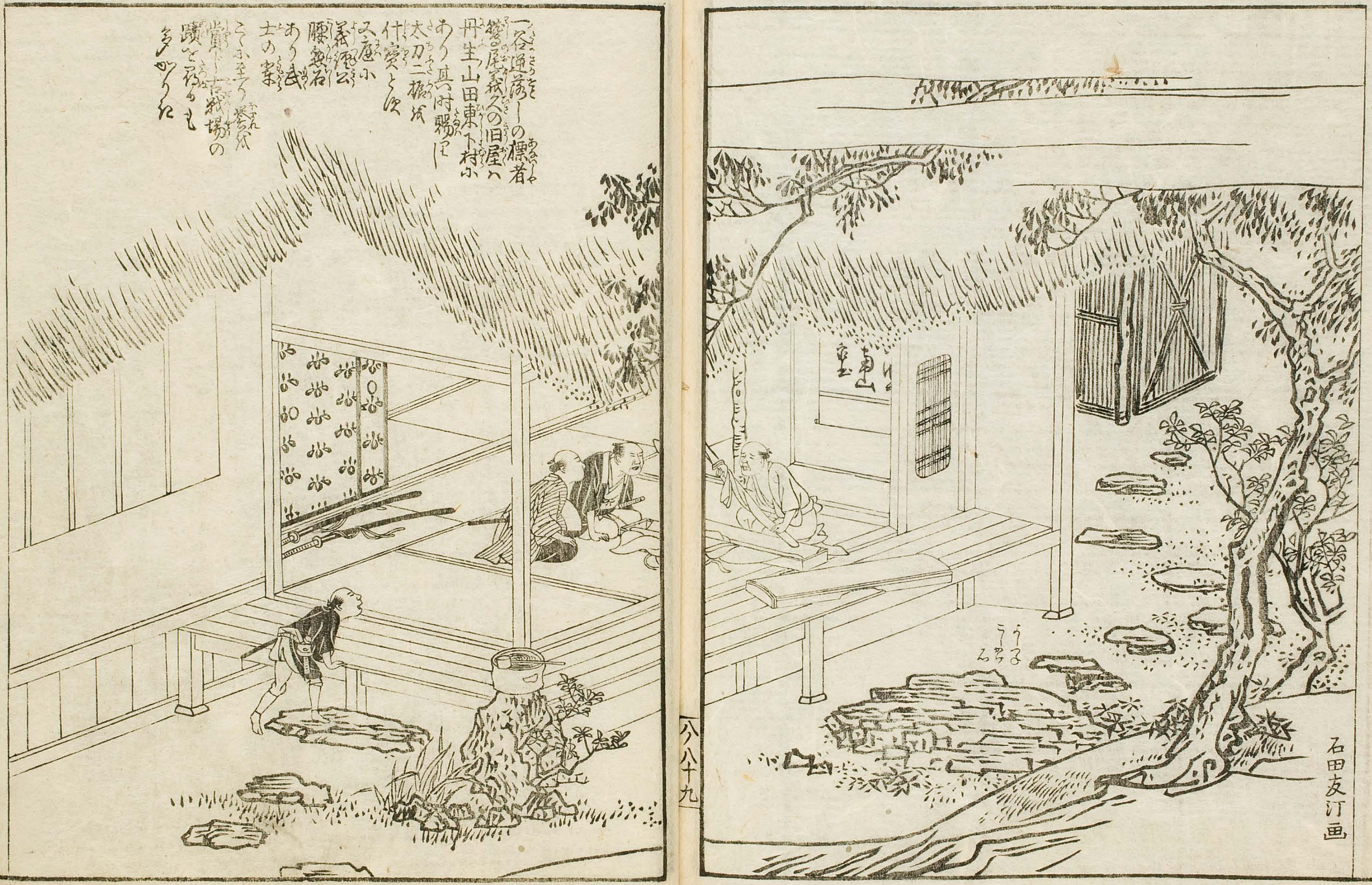
弁慶太刀 無銘長四尺三寸目釘穴一ツ棒鞘 文亀年中火に入て当時錆あり

亀井六郎太刀 無銘長三尺六寸目釘穴三ツ 棒鞘

義経公腰懸石 高サ壱尺壱寸巾三尺六寸又ふ初メハ門前の山際にあり後世鷲尾庭前に移して
鷲尾義久より当代まで廿九代家名相続し丹生谷
郷中の村甲みしく鷲尾源吾と称す

平家物語云
頃ハ二月初の事なれハ峯の雪村消て花かと見ゆる所も
有り谷の鶯声信じく霞に迷ふ所もあり登れハ白雪皓々と
して聳へ下れハ青山峨々として岸高し松の雪だに消やらで
苔の細道幽なり嵐にたぐふ折々ハ梅花とも又疑はれ
東西に鞭を揚駒を早めて行程に山路に日暮ぬれバ
皆下居て陣を取る愛に武蔵坊弁慶或老翁一人具
して参りたり御曹司あれハ如何にと宣へバ是ハ此山
の猟師で候と申すれバ扨ハ案内能知たるらん争か在
仕ずでハ候べき御曹司さまで有らん是より平家の城郭

一谷逆落しの標者
鷲尾三郎義久の旧屋ハ
丹生山田東下村に
あり其時賜りし
太刀二振并
什宝とて
又庭に
義経公
腰掛石
あり武
士の墓
こゝに至りて懐旧
賞し古戦場の
蹟を弔ふも
多かりし



石田友汀画

一谷へ落さんと思ふハ如何に努々叶ひ候ましく凡三十丈の谷十五丈の岩崎なとをは容易人の通ふべき様も候ハず況其上城の内よりハ落穴あり堀に菱をも植て待進らせ候らん益て御馬などハ思も寄らずと申ければ御曹司さてさ様の詞ハ鹿ハ通ふや鹿ハ通ひ候世間ぐに暖に成候へハ草の深に臥んとて播磨の鹿ハ丹波へ越世間ぐに寒なり候へハ岩ね合に食んとて丹波の鹿ハ播磨の印南野へ越候とぞ申なる御曹司馬場ごさんあれ鹿の通ふんぢる詞と馬の通ハさるべき様や有さるらば聽く汝案内者せよと宣へハ此身ハ年老て如何にも叶ひ候まじと申汝拙汝に子ハ無かと仰られバさん候熊王とて生年十八歳に成る小冠者候奉公御曹司聽く髻とり取上させ給く父を鷲尾庄司武久と云間これをは鷲尾三郎義久と名乗せて一谷乃先かせさせ案内者にあそ具せられるまで平家亡び源氏の代に

成りて後鎌倉殿と中違ふて奥州へ下り討死せし時鷲尾三郎義久と名乗て一所に死たる兵也

山王祠 同荘坂本村にあり是も亦丹生谷例祭俱につとむ

府之井 社前にあり清冷なり当荘の名泉也

若一王子祠 同荘福地村にあり上梁文云永仁五年橘長綱建立應永十五年重修 後に大日堂あり弘仁二年正観沙門再興也

八王子祠 同荘原野村にあり上梁文云天文十七年重修

白瀧辨財天祠 同村の里長栗花落氏が家園にあり此家の祖先白瀧姫を祭るとぞ

栗花落井 社前にあり長サ二尺巾二尺深さ三尺底白砂敷て水かし清泉例年五月入梅の節栗の花落るを期とし此地より清泉湧出る故に栗花落を家人の氏とし毎年不変に涌出まるにもある度世にいふ乾入梅又湧半かし又入梅穴世に多し

相傳ふ栗花落氏の祖先山田郡司直勝と云人淡路廃帝の時朝廷に仕へ其頃横萩右大臣豊成公の息女白瀧を恋慕し千束の文錦木の数つもりぬるの奥に

水無月の稲葉の露もこがるゝに雲井をおちぬ白瀧の糸

白瀧姫返し

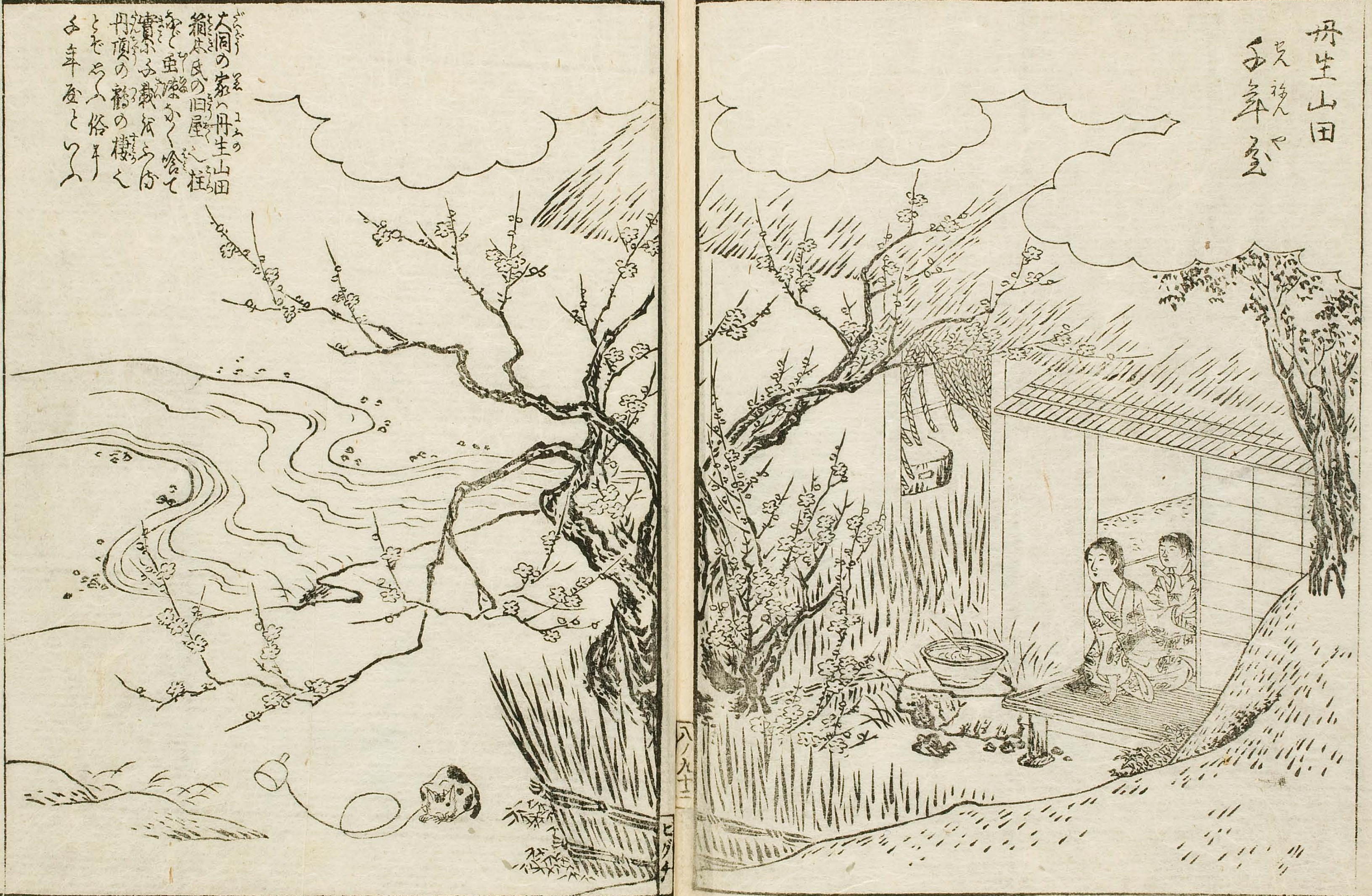
雲井からついにおつる白瀧をさのみな恋そ山田男よ

帝これらの事を叡聞ありて其情の切なるを憐み白瀧姫を直勝に

爾雅曰四五月梅欲
黄落則水潤土溽
柱礎皆汗蒸鬱
成雨謂之梅雨
丹生山田原村栗花落
氏のお栽ふ入梅穴
ありて水脈かよひて
あふれ出るを以て
風土の奇といふ
べし京郷名着
町の西泉町にも
あり

丹生山田
千年屋

大同の家ハ丹生山田
箱本氏の旧屋之柱
ありし虫漆かく喰て
實ふ千載余ふ及
丹頂の鶴の棲く
とぞとへ俗ニ
千年屋といふ



天国の名剣を副て賜はりける則て三嶋に至て白瀧姫一男子を
産む終に死ぬ其家の東境に葬りて廟塔を建るに栗の花落
たる此月雨なれば此墓より名泉涌出る天聴に達し詔有て白瀧姫
を弁財天と崇め氏を栗花落と賜りける出生の子は成人の後左衛門佐
真利とめされける廃居　今猶上宮と云　丹生山田へ行登の時栗花落井あり

丹生の山くるゝその花は咲にけりつたて流る栗花落の井みて

按るに様数豊成卿は淡路押領使となり押領使の時左遷せらる此真猪白瀧姫も
みな親族なれはこゝに退去し豊成卿の息中将姫も雲雀山へ蟄居せられしと

千年家　同荘衡原村獺木氏の家をいふ近年まて柱に文ありて大同二年の文字ありしの今
なし此家の柱戸等に古代の趣多く凡千年余の体を又同谷東小部にも
千年家ありこれも古代の家にて此谷に傳へたり都て山中なれは所々にあり
これより西山陰道の山中谷々の里には古き家屋多し

谷深に平家の人や菊の花　田鶴

義経椎木　同荘藍那村南の入口にあり義経此木陰にて陣をとる此所より右へ入て相談辻
藍那村にあり軍議評定の所又鵯越の峠にあり

摂津名所図会

MWUL